

<所内資料>

第10回全国マシジド（モスク）代表者会議
「日本のムスリム・コミュニティを問い直す」
2018年2月3日

July, 2019

早稲田大学多民族・多世代社会研究所

Institute for Multi-ethnic and Multi-generational Societies, Waseda University

早稲田大学アジア・ムスリム研究所

Institute of Asian Muslim Studies, Waseda University

早稲田大学イスラーム地域研究機構

Organization for Islamic Area Studies, Waseda University

目次

目次.....	2
序.....	3
プログラム.....	4
編者.....	6
会議運営者・協力者.....	6
編集協力者.....	6
関連研究助成プロジェクト一覧.....	6
主な会議出席者.....	7
議事録.....	8
第1部 日本のイスラームの将来に向けて.....	8
第2部 若者世代とムスリム・コミュニティの課題.....	33

序

本報告書は、2018年2月3日に早稲田大学（早稲田キャンパス）で開催された第10回「全国マスジド（モスク）代表者会議—日本のムスリム・コミュニティを問い直す」の会議録である。本会議は、2009年に「全国モスク代表者会議」として始まり、2012年に名称を「全国マスジド（モスク）代表者会議」と変更して、継続して開催している。滞日ムスリムのマスジド関係者の方々をはじめ、若者世代のムスリムもお招きして開催した今回は、主催者側を含め40名前後の参加者があり、世代を超えて、忌憚のない意見交換や議論が行われた。

今回の会議では、いわゆる移民第1世代にあたる外国人ムスリムおよび日本人ムスリムのモスク関係者の方々をはじめ、一般の日本人ムスリムの方に加えて、若者世代の外国人ムスリムと日本人ムスリムの方々にも、お集まりいただき、世代間対話という形での議論も行われた。具体的には、第1部では、「日本のイスラームの将来に向けて」と題して、現在のムスリム・コミュニティを担っている中高年世代のムスリムの報告を受けて、議論を行った。第2部では、「若者世代とムスリム・コミュニティの課題」と題して、中高年のムスリムと若年層のムスリム、いわゆる親世代と子ども世代にあたるムスリムの方々に、議論に参加していただき、活発な議論が展開された。

会議開催にあたっては、滞日ムスリムの親世代の方々、若者世代の方々をはじめ多くの人たちから多大なご協力をいただいた。これら沢山の皆様に厚く御礼申し上げ、今後のご協力についても改めてお願いする次第である。

2019年7月

岡井 宏文
店田 廣文

プログラム

第10回

『全国マシド（モスク）代表者会議—日本のムスリム・コミュニティを問い直す』

日時：2018年2月3日（土）13:00~17:00

於：早稲田大学・早稲田キャンパス（地下鉄東西線早稲田駅より徒歩5分）

26号館7階 702教室（通称：大隈記念タワービル）

早稲田キャンパス内地図：<https://www.waseda.jp/top/access/waseda-campus>

<https://www.waseda.jp/top/assets/uploads/2014/08/75fbe93c96f198b17f2f294320b48990.pdf>

主催：早稲田大学多民族・多世代社会研究所

早稲田大学イスラーム地域研究機構

早稲田大学アジア・ムスリム研究所

スケジュール：

13:00-13:10 開会の挨拶 早稲田大学多民族・多世代社会研究所長 店田廣文

13:10-14:45 第1部 日本のイスラームの将来に向けて

14:45-15:15 休憩と礼拝（サラート（ASR））

15:15-16:50 第2部 若者世代とムスリム・コミュニティの課題

16:50-17:00 閉会の挨拶 早稲田大学アジア・ムスリム研究所長 小島 宏

早稲田大学イスラーム地域研究機構長 桜井 啓子

司会：早稲田大学多民族・多世代社会研究所長 店田廣文

早稲田大学人間科学学術院・助手 岡井宏文

参加予定者（マシド関係者その他）：

前野 直樹氏 アキール・シディキ氏

永井 彰氏 ハールーン・クレイシ氏

林 純子氏 中村 洋幸氏 古城 良氏

カーン・ターヒル氏 浜中 彰氏

礼拝室：26号館7階 701/703教室

PROGRAM

The 10th Meeting of Representatives of Masjids in Japan

“ Muslim Communities and Second Generations in Japan ”

Date : February 3rd (Sat.) 2018, 13:00-17:00

Venue: Waseda University, Waseda Campus, No. 702 Room, Bldg.#26

Campus Map <https://www.waseda.jp/top/en/access>

<https://www.waseda.jp/top/assets/uploads/2014/08/75fbe93c96f198b17f2f294320b48990.pdf>

Organizers:

Institute of Multi-ethnic and Multi-generational Societies, Waseda University

Organization for Islamic Area Studies, Waseda University

Institute for Asian Muslim Studies, Waseda University

Time Schedule:

13:00-13:10 Opening Remarks

Hirofumi Tanada, WU Institute of Multi-ethnic and Multi-generational Societies

13:10-14:45 Part 1. Future of Islam in Japan

14:45-15:15 Break/Salat

15:15-16:50 Part 2. Intergenerational Inheritance of Muslim Communities in Japan

16:50-17:00 Closing Remarks

Hiroshi Kojima, WU Institute for Asian Muslim Studies

Keiko Sakurai, WU Organization for Islamic Area Studies

Chair: Hirofumi Tanada, WU Institute of Multi-ethnic and Multi-generational Societies

Hirofumi Okai, WU faculty of Human Sciences

Participants:

Mr. Naoki Maeno

Mr. Aquil Siddiqui

Mr. Akira Nagai

Mr. Qureshi Haroon

Mrs. Junko Hayashi

Mr. Akira Hamanaka

Mr. Hiroyuki Nakamura

Mr. Makoto Kojo

Dr. Khan Tahir and other members will participate.

ROOM for Salat : Room No. 701/703, Bldg. 26

編者

(所属は 2018 年 2 月現在)

岡井 宏文 早稲田大学人間科学学術院・助手

店田 廣文 早稲田大学人間科学学術院・教授

会議運営者・協力者

(所属は 2018 年 2 月現在)

店田 廣文 早稲田大学人間科学学術院・教授

長谷部圭彦 早稲田大学イスラーム地域研究機構・次席研究員

岡井 宏文 早稲田大学人間科学学術院・助手

小野 亮介 早稲田大学人間科学学術院・助手

小池 寿裕 早稲田大学大学院人間科学研究科・修士課程

クレシ愛民 早稲田大学大学院人間科学研究科・修士課程

ゴインシ 早稲田大学大学院人間科学研究科・修士課程

編集協力者

(所属は 2018 年 2 月現在)

小野 亮介 早稲田大学人間科学学術院・助手

クレシ愛民 早稲田大学大学院人間科学研究科・修士課程

関連研究助成プロジェクト一覧

本会議および本報告書は、以下の研究助成による研究成果の一部である。

- ・「人間文化研究機構 (NIHU) プログラム イスラーム地域研究」(早稲田大学拠点) 研究代表者: 桜井 啓子
- ・平成27～29 度科学研究費補助金基盤研究 (C) ・課題番号15K03886「滞日ムスリムの生活世界の変容とムスリム・コミュニティの持続的発展」研究代表者: 店田 廣文
- ・平成30～32 度科学研究費補助金基盤研究 (C) ・課題番号18K01976「滞日ムスリム・コミュニティの地域社会活動と地方自治体の多文化共生政策の課題」研究代表者: 店田 廣文

主な会議出席者

(順不同・敬称略、所属は2018年2月現在)

岡井 宏文 早稲田大学人間科学学術院・助手
長谷部圭彦 早稲田大学イスラーム地域研究機構・次席研究員
クレシ愛民 早稲田大学大学院人間科学研究科・修士課程
桜井 啓子 早稲田大学国際教養学術院・教授
店田 廣文 早稲田大学人間科学学術院・教授
前野 直樹氏
アキール・シディキ氏
永井 彰氏
ハールーン・クレイシ氏
林 純子氏
中村 洋幸氏
古城 良氏
カーン・ターヒル氏
浜中 彰氏

付記：

議事録の作成にあたり、発言内容を損なわない範囲で、語句の追加や修正、余分な語句の削除や説明の追加などを行った。聞き取りの困難なところについては、一部削除したところもある。編者が説明として追加した部分や注記は、()で明示した。

議事録

第1部 日本のイスラームの将来に向けて

店田 きょうは、年度末のお忙しい中、お集まりいただき、ありがとうございます。今回で、10回目というマスジド代表者会議になりました。2009年から始めましたけれども、全国のムスリムのかたがたのご協力のおかげで、10回目を迎えることができましたので、改めて、お礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

きょうは、10回目ということで、『日本のムスリムコミュニティを問い直す』という、よく使われる表現を使わしていただきましたけれども、改めてムスリムコミュニティについて、考えてみたいということで、こういうタイトルにさせていただきました。

参加の方については、このあいさつの後に順次、ご紹介させていただきますけれども、今回、改めて10回目を迎えて、私たちのほうも新たな試みも実は始めまして、午前中には、若い第2世代だけの部会というのも設けて、朝の9時半から12時半過ぎまで大変、熱のこもった議論が行われました。

この後、ここで、代表者の方は、多くはいわゆる第1世代という形になる、相当するような年齢の方なんですけれども、若い世代の方とのディスカッションを、時間が許す限り、後ほど、試みてみたいと思いますので、ぜひ、よろしく願いいたします。

それでは、時間も過ぎてますので、早速、始めたいと思います。まず、参加者のご紹介ということで、私のほうから、名前だけ申し上げますので、簡単にご発言いただければと思います。

まず、前野直樹さん。

前野 アッサラーム・アライクム、皆さん、こんにちは。よろしく願いします。

店田 ハールーン・クレシさん。

ハールーン アッサラーム・アライクム・ワラフマトゥッラー。よろしく願いします。

店田 古城良さんです。

古城 アッサラーム・アライクム。よろしく願いします。

店田 中村洋幸さん。

中村 アッサラーム・アライクム。中村です。よろしく願いいたします。

店田 それから、西澤、ちょっと難しい。西澤さんです。

西澤 シャヘレヤールです。よろしくお願いします。

店田 浜中さんです。

浜中 浜中と申します。四国からやってきました。新居浜 Masjid の担当しています。

店田 永井さんです。

永井 アッサラーム・アライクム・ワラフマトウッラーヒ・ワバラカートッフ。大塚 Masjid というので、皆さん、知られているところは、宗教法人日本イスラム文化センターと申します。宗教法人ということで、理事が理事会というものをつくって、運営するようになってますけれども、その理事の1人でございます。それから、皆さんに関係あるというか、目に触れるようなものとしては、大塚 Masjid の金曜日のフトバってありますけども、これを2005年から、英語の原稿も渡してもらって、アラビア語できないものですから、日本語に直すということをやっております。以上でございます。

店田 同じく、大塚、日本イスラム文化センターからいらっしゃったアキール・シディキさん。

アキール アッサラーム・アライクム・ワラフマトウッラーヒ・ワバラカートッフ。どうぞよろしくお願いします。

店田 大分からご参加のターヒルさん。

ターヒル アッサラーム・アライクム。大分の別府市のほうからカーン・ターヒルと申します。よろしくお願いします。

店田 それから、林純子さん。

林 弁護士をしております林と申します。よろしくお願いします。

店田 ありがとうございます。以上の方を参加者として、まず、第1番目の最初のパートでは、日本のイスラムの将来に向けてということで、いろいろお話をしていきたいと思

います。まず、最初に、いつものようにと言うと変ですけども、前野さんのほうから、お話をいただきたいと思います。よろしくお願ひいたします。

前野 アッサラーム・アライクム、すみません。いつものように口火を切らせていただくということで、貴重な約1時間半の時間ですので、手短かに約5分ください。課題提供させていただきたいと思います。

皆さん、イスラム史上の知の巨人、イマーム・ガザーリー、ご存じの方、分かりますね。知らない方おられます？ 西暦でいえば、1111年に亡くなられたイランのニーシャープール出身の方で、ダマスカスや、活躍されたその大著に『イフヤー・ウルームッディーン』という、『宗教諸学の再生』というものがありますが、その彼が、一番最後に残されたという書物に、『ミンハジ・アルアービディーン・イラー・ジャンナティ・ラッビルアーラミーン』（『全世界の主の天国へと至るしもべたちの道』）という著作があります。その中で、ムスリム個人が、唯一の神へと近づいていくための道、唯一、ムスリム個人が成長を目指すときにどんな障壁が出てくるのかっていうことを、特に語っておられるんですけども、7つ挙げておられます。その7つをご紹介しつつ、私たちが、これからトピックとするのは、日本のイスラムの将来に向けてというのが、大きなテーマです。【板書を同時使用】

コミュニティがトピックなわけですけども、コミュニティというのは、つまるところ、個人が集まる所。個人によって構成されるものだと思いますので、そういった視点からムスリム個人が目指すべきところででくわす障壁を、コミュニティ全体に、重ね合わせて、見ていけたらと議論の口火とできたらと思うわけです。

まずは、知識、学問の壁です。アカバタルイルム。

それから、過去の罪やしがらみ。アカバタルマアースィバ。

それから、試練や心配。将来の糧が心配になったですとか、個人にいろんな不幸や災難が襲ったですとか、そういったものです。

すいません。こちら。四つ目が試練でした。四つ目が不幸や試練です。不幸や試練という障壁です。

そして、つまらなくなってしまうという、倦怠期です。倦怠期を迎えるという試練が五つ目。

それから、アカバタルカワーディフ。心の病。見栄のためにやっていたりですとか、有名になるためにやっていたり、富のためだったりとか、それが六つ目です。

最後に、感謝の壁っていうんですけども、きちんと、唯一の神様に感謝できているか、恩を忘れていないかというものなわけですが、この七つの壁、障壁が、ムスリム個人が、自分の成長、信徒としての成長を目指したときに出くわす、遭遇する壁だということなんですが、七つも扱ってられないので、最初の三つに鑑みて、このコミュニティで、コミュニティのこれからを考えると、問題提起、課題提起できることは何かというところを見たいと思います。

まず、知識の壁です。最初の出くわす知識の壁。幸いなことに、アルハムドリッラー、今や、日本のムスリム史上、イスラム史上、初めてのことだと思えますけれども、日本ムスリム協会の五反田の日本イスラム文化交流会館で、1年以上になりますが、毎月、各週交代で、日本出身の日本人のイマームが、金曜説教を担当しています。これは、これまで、いまだかつて、どこにもなかったことです。という意味でものすごくうれしい、ありがたい成長、発展だと思っています。

しかしながら、日本全国を見た場合、日本全国のマスジド、礼拝所を見たときに、果たして、ホームグロウンスカラーズ、日本出身の、DNA はどうでもいいです、日本語を母語とする学者、教育者が十分足りてるかといえば、まだまだ圧倒的に少ないです。そういった意味で、その辺の底上げが必要ではないかと、課題ではないかというのが、一つ目の課題提起です。

二つ目、過去の罪やしがらみという点についてお話しますと、かつては昔話として、私も聞いた話でしかないんですけども、某センターで外国出身のムスリムと日本出身のムスリムが、やり方の違いをめぐって、意見の相違が原因で、あるいは、誰がリーダーをするんだ、どうこうとかいった原因でけんかまで発展したとかいうような話があったとか、ないとか聞くわけです。そのような形で、いわば、本来のイスラムならば、皆さんご存じのとおり、国境を越えた、肌の色を越えた、文化を越えて一つになれる、つながれるというのがイスラムの真骨頂なわけですから、そういったものはあり得ないんですけども、私たちは人間ですので、まだまだそういったところが見られるのではないかと。

幸い早稲田大学の関係者の皆さまには、心から感謝しますが、皆さんのおかげ、ご協力を得て、このような出身を問わず、日本で、各地で、マスジドが関わってる、あるいは活動に関わっているムスリムたちが一堂に会する機会をもう 10 年にもわたって持ち続けていられるというのは、これは、先ほど言いました良い点、成長、発展に数えられる点だと思います。各地のマスジドでは、まだまだ行けば、やはり、パキスタン人中心のマスジド、そこに行ったらウルドゥー語ばかりが飛び交っていたる所ですとか、あるいは、バングラデシュばかりのマスジド、ベンガル語ばかりですとかいうように、ものすごく、エスニックな民族主義的なイスラムがらみの活動というのが、まだまだ根強くあるのではないかと、そういった課題が二つ目です。

三つ目は、申しそびれましたけど、邪魔だてするものというのは、一つは我欲です。人間には良心が、良い心が備わってるわけですけども、悪いところもあって、その悪いところが、自己中心的な考えが、どうしても頭をもたげるところがあって、それが信徒としての成長の妨げになるっていう話なんですけども、コミュニティの場合もそうではないか。その一端として、さまざまな主義、主張がございます。

幸い、日本は、例えばアメリカで起こっているということを見聞きするような話、あるいは、欧米だったりムスリム諸国各地であったりというような、そのような特に政治色の強い、主義、主張の違いが故の争い、いさかいというのは、日本では幸い、ないと思いま

す。まだまだこれは、さまざまな理由が原因に挙げられると思いますけども、例えば、さっきの知識層の底上げをするといった意味でも、例えば留学先が非常に限られていたり、どこどこ Masjid の活動支援してくれる所が限られているが故に、その色が出てしまっていたり、そのような偏りがどこかしこで見られるのではないかと。なので、純粋にこれからの日本の、イスラムの将来に向けてを考えたときに、どうなんだろうというのが、三つ目の課題です。以上、長くなりましたが、ありがとうございました。

店田 はい。ありがとうございました。ガザリーの話から三つの課題ということで、日本におけるムスリムコミュニティの発展というものを考えた上で、前野さんが気になるといいますか、気にかけていらっしゃる点を挙げていただいたわけです。おそらく今の話は日本における外国人、日本人を含めたムスリムの中の交流、あるいは、その両者の関係のこれからというものをどのようにしていくのかっていうことを考えていくのが、日本のイスラムの将来にとって必要だということだと思んですが、今の点に関して皆さんのほうからご発言をお願いしたいと思います。はい、古城さんお願いいたします。

古城 日本語大丈夫です。まず知識のどこ、確かに金曜ジューマアに行っても、福岡は英語、アラビア語と英語で、子どもはもちろんですけど、大人の方も英語も分からない方っていうのも、当然、礼拝には来てる中で、なかなか、じゃあ、何語がいいのかというのは課題ではあるんですけど、確かに日本語の場があるといいなというのは思います。

2 番目のしがらみですけど、確かに、エスニック色とまでは言わないですけど、それぞれの考え方があるので、今回の問題になったのが、Masjid にキッチンを作るかどうかっていうのが問題になったことがありました。パキスタンの方たちは、ラマダンのときに皆さんに料理を振る舞うのが、とてもいいことだと、考えたんですけど、アラブ系の方たちは、Masjid は礼拝する所だから、料理を作る所じゃないとあって、かたくなに対立した時期もありまして、今はキッチンありますけどね。

あと、我欲とか心配の部分ですけど、特に思うのは、それに当てはまるのかどうかっていうのが分からないんですけど、特にボーンムスリムの方たちが、ボーンムスリムの方たちを前に言うのもあれなんですけど、頑固といいますか、日本の社会にマッチしないイスラムを強調してるように思うんです。なかなかそこが、そこで、広がりがありませんし、それは、しがらみの部分とも共通すると思うんですけど、結局自分の知ってる、ムスリム、自分の解釈のイスラムが、正しいという部分があるがために、どうしても、対立をするし、一歩外に出ても、それをかたくなに強調するがために、なかなか周りとは溶け込めない部分っていうのはあるなというふうには感じております。

前野 直接、ディスカッションして、大丈夫ですか。

店田 ディスカッションして、前野さんが多分、先にアンサーを。

前野 具体的に、例を挙げていただけると、例えば、いわゆるボーンムスリムのかたがたが、日本にマッチしていないイスラム、強調したがる、日本にマッチしてないイスラムというのは、例えば具体的に、どんなものですか。

古城 そうですね。学校教育に対してが、一番多いですかね。一番多いなと感じます。現場にいてというか、相談を受けるケースで。例えば、体育の授業であったりとか、音楽。

前野 それは、完全に出るなど、出席するなど。

古城 そうですね。工夫をすれば、こうすればいいやとか、プールの授業だって、水泳はがんばってくださいって、ムハンマド様はおっしゃってますけど。いうところを、なかなか自分たちの解釈で、あるいは、時々ずるい人がいて、ボーンムスリムとか、そういう意味で言ってるんじゃないくて、ずるい人がいるっていう意味です。ずるい人がいて、自分たちがしたくないことを、イスラムで駄目って言われてるっていう人がいるんですね。だから、それを学校の先生たちは分からないんで、どうすればいいのかって、時々あるみたいで。よろしいですか。

前野 ありがとうございます。

店田 はい。

永井 ごめんなさい、名札。

古城 古城です。

永井 いつもしといてください。

店田 今、日本人ムスリムの古城さんからお話が。ボーンムスリムである、ハールーンさんから、お話をお願いいたします。

ハールーン 私が日本に来たのは、1991年です。元留学生ですけど。その当時、マスジドでいえば、神戸マスジドしかないんです。もちろん、イスラミックセンターと、ムスリム協会、それからマアハドでジウムアやってる所はあったけど、マスジドでいえば、神戸マ

スジドしかないんです。

その当時、私自身が、東京ジャーミイの前の道、雨降ると、橋の下でジュムアをやったんです。なかなか、その当時のイスラムの団体、もちろんいっぱいがんばってくれたんですけど、リーダーシップが足りなかったんです。特に日本人ですね。そしたら、ギャップがあって、それは、いろんな地域の人たち、パキスタンの人ですとか、スリランカですとか、バングラデシュですとか、そういう人たちが Masjid をつくったんです。

日本では、とてもありがたいことは、Masjid をつくるのは非常に簡単です。何百万円から何千万円集めれば、それ、すぐ集まるんですね。Masjid できちゃうんです。許可、どこかからの、警察の許可とか、どっかの許可は、必要ないんです。

一方で隣の国、韓国の例を申しますと、韓国で立派なイスラミックセンター、何年前につくったんです。でき上がったころ、4 万人の韓国のクリスチャンが、反対の運動起こして、Masjid の許可下りなかったんです。しょうがないから、裁判かけて、ムスリムの団体が、1 年半かかって許可が下りたんです。その違いもあります。日本はもう、アルハムドリッター、とても、その意味では感謝してます。

今は、大体 100 ぐらいの箇所の Masjid があると思うんです。ムサッラーは、もうちょっと多いです。この 30 年間、ものすごく早いスピードで Masjid も増えてますし、ムスリムの人口も増えてます。日本人の改宗してる人たちも増えてます。

そうすると、自分でも、私も例えば、普通の学生として来てるので、イスラムの知識、特別あるわけでもないし、向こうで経験もあるわけでもないです。みんなでがんばって、できる範囲で活動をやってるんです。確かに、いろんなそういうところは、パキスタンで見たイスラム、それからスリランカのイスラムとか、それしか分からないもんですから、そういう問題起きる所もあります。だけど、多くの人たちは、大体日本に暮らして、日本のいい所たくさん勉強して、自分のビジネスもそうですけど、日本の社会に合わせてやってる人たちは圧倒的に多いと思います。

ですから、もうちょっと日本人のリーダーシップが。今一番期待してるのは日本ムスリム協会です。先ほど、前野さんのおっしゃったように、1 年前から、五反田で非常にいろんな活動に力入れてますから、ムスリム協会だけに、全ての責任はないんですけど、他の団体もがんばっていけば、非常にこういう先ほどの問題ありますけど、多分、乗り越えて、うまくいくんじゃないかと思えます。

私が心配してるのは、第 2 世代の教育。それが一番、私が心配してます。たとえばジュムアのフトバがあっても、子どもさんは学校行ってるから、参加しないです。でも、週末、彼らの教育、タルビーヤをやってる所はあるか、ないかです。非常に少ないです。そこは、日本語の問題ではないです。

やってもなかなか難しいです。子ども、高校生、大学生になると、非常に、日本の社会の影響が多いので、イスラムのことは難しいです。そういうことは、どっちかということ、私は非常に、私の息子も今、高校 2 年生ですけど、いろんな反抗期の時期もあるんですけ

ど、そういうこと経験してるもんですから、教育のことでは非常に私は、どっちかっていうと心配しております。

店田 ありがとうございます。先ほど、古城さんのほうからも教育のお話が出ました。ハーレーンさんから教育というので、教育一つとっても、考え方が違うケースがあるんじゃないかということですね。一方で、日本人のリーダーシップについて、ハーレーンさんから期待されているっていうふうな声もあったんですけども、日本人ムスリムの方のほうから、ご発言お願いできますでしょうか。はい、じゃあ、永井さん。

永井 アッサラーム・アライクム・ワラフマトゥッラー。永井でございます。先ほど、マスジドの中では、ウルドゥー語とか、ベンガリーとか、そういうのが飛び交っていると、そういう所がかなりあるというお話あったんですけども、各マスジドというのは、海外から来られた、そういう方たちが設立されたっていうことで、ただ、ここは日本なんだから、日本人がやってくれるなら渡したいという、みんな、そう思ってるんです。ところが、なんで日本人が引き受けてないのかっていうと、一言でいえば信仰心です。信仰心のあついで人が、3人くらいいなければ、一つのマスジドってのは運営できません。

それからもう一つは、日本人が1人でもいいですよ、私がやりましようつったときに、自信がないんです。なぜかっていうと、お金ですよ。だって建物あれば、雨漏りしますよ。そうすると修理代かかるんです。日本人の信者に対して声掛けたって、お金集まる所ないですよ。ところが、今、現状見ると、ちゃんとお金集まるんですね。それはなぜかっていうと、それぞれの言葉の人たちがマスジドに実際に来て、マスジドを使って、使うから自分たちのマスジドだってことでお金を出すんですね。

だから日本人が日本のイスラム施設を支えるようになるためには、それだけ日本人が、マスジドに、第1番目は、イスラム施設っていうとマスジドですから、そこに来るか来ないかっていうことなんです。そうすると、来るか来ないかっての、これ、ニーヤの問題です。ニーヤというのは意識です。意志です。行こうという気持ちです。この気持ちがなければ来ないです。それがないから来ないんです。私にはそう見えます。もっと大事なものがきっとあるんです、その人たちには。そう見えます。私には。

私もそうでしょ。そういうことですから、これから本当にどうなるんだろうか、というのは、日本ムスリム協会というのは特別なものです。そこで、ただ一つ残念なことあるんですけど、それは申し上げませんが、先ほど、前野先生のほうから日本人によるフトバが始まったという画期的な、世界の歴史を変えるような、イスラム史を変えるようなことが起こってるわけですけども、そういうものが今後、どういうふくらみを持って継続的にいけるのか、また、それがさらに発展していくのかっていう、そういう過渡期なのかなっていう気もいたしております。以上です。

店田 ありがとうございます。永井さんから、信仰心の問題が出てきました。もう一つは、お金ということも挙がったんですけども、日本人の側から、日本人ムスリムの方のほうから、今、永井さんからの問いかけではあるんですけども、日本人ムスリムの方のほうから、それに対する、どうでしょう。中村さんか、あるいは、古城さんか。

中村 一言。アッサラーム・アライクム。私が日本人を代表するわけじゃないですけど、私個人というふうな立場から申し上げさせていただきます。日本人の、私自身の思考形式というんですけども、信仰はまず個人の問題だというに考えてます。個人の問題。なんとかして救われたいという。そこに、方法論として集団が出てくるかもしれないし、あるいは、その礼拝みたいに。

ただ、イスラムっていう完成しきった宗教形式を、最初から全く信仰と関係なく、あるいは、宗教理念と関係なく、私たちにポンと押し付けられて、それに従わなければ信仰心がないとか言われると、ほとほと困って、もういいかなっていうような感じになるかもしれない。

実質は、福岡マスジドに毎年、多くの方が入信されますけども、その後追ってみると、来ないんですモスクに。いろいろ考えます。私たちの対応が悪いのか、社会的な問題もあります。大きな事件があると、マスジドから離れる方もおられます。

ですから、まずは一番最初、一定の形式を持って、それを私たちに押し付けられたときの苦しさ、つらさっていうのが、日本人には、実はあるのではなからうか。そこを緩めて、少しでもアプローチしやすいような形にもってってもらいたい。これは、知識を持つてる方たちの度量の問題だと思います。知識を持つてるから、この知識でもって、みんなを導こうっていうんでなくて、知識を持ってない人のレベルまで落ちて行って、落ちてって表現悪いですね。階段を下りて行って、彼らをなんとかして救済しようという気持ちがあれば、もう少し緩やかな形で、みんなを集められるんじゃないかという気がします。ちょっと簡単ですけども。

店田 ありがとうございます。前野さん。

前野 すみません。よくぞ言ってくださいましたと、お二人に申し上げたいんですけど。永井先生の言われる意識が足りない、全く同感ですし、中村さんの言われるそのような押し強いアプローチに嫌気がさして、来なくなる人も多いんじゃないか。同感です。

なので、ことあるたびに、特に私がボーンムスリム向けのお話をするときに強調するのは、あまりにも皆さんが優し過ぎて、純粋な親切心が講じて、新しい日本人の新人信者にとっては、恩着せがましいアドバイスがたくさん寄せられるんですと。なので、ステップ・バイ・ステップでお願いしますっていうふうに言うんですけど。要は、生まれたばかりの赤ちゃんに、これおいしいからって、世界中のごちそうを全部持ってくるような。

(不明) 優しいですね。

中村 優しいです。

前野 そんな感じですよ。なので、永井先生に同感ですし、私も20年以上たちますけど、24年経て、新入信者はたくさん毎日のように増えてはいるんですけど、 Masjidに残る人たちとか、続けて来る人たちというのは、あんまり変わらない、どうしてだっていうのは、やはり、みんなそれなりに意識はあると思うんです。最初のころは。でも、それが、残念ながら、いろんな形で、つぶされてしまう現実もあるんじゃないかということです。それが、そういう勉強しに来ようと思って、来て、のぞいてみたけれども、自分にはまるで分からない外国語ばかりで、ああ、すごい場違いな所に来てしまったという現実であったりですとか、先ほど言った、ものすごい、みんなが優しいばかり、根掘り葉掘り、最初の日聞いてきて、優しいが故に、ものすごい親切が故に、これはしないほうがいい、これはしなくちゃ駄目だよっていうもの、全部浴びせられて、そんなのついていけない、やっていけないと、もう、次から来なくなってしまうという現実があるのではないかと思います。

店田 はい、古城さん。

古城 はい。そうですね。皆さんのおっしゃるとおりの部分がかかなりあって、ポーンムスリムの方だけじゃないんですけど、日本人ムスリムもそうなんですけど、ムスリムじゃない方から、イスラムってどういう宗教ですかって聞かれたときに、六信五行を話す方がかなりたくさんいらっしゃるというふうにいるんですけど、私はもっと簡単な話をしてて、最後の審判があるから、自分がいい人であることにチャレンジする宗教ですよということと、あとは、神様、アッラーがいるので、自分が間違っただ道に行こうとしたら、邪魔をしてくれる。正しい道に行こうとしたらフォローしてくれるということだけを説明するんです。まずは、そこだけを説明して、それであと、イスラムの六信五行の部分の少しづつ分かればいかなというふうには、ムスリムじゃない日本人の方には説明をして、それが、比較的、日本人の方には入りやすいようで、よくMasjidに足を運んでもらって、その後が続いてないっていうのは、正直残念なところなんですけど、何が原因かなっていうのは、われわれも当然に反省をしてるところなんですけど。

福岡Masjidができた、つくった目的ってというのが、外国の方の礼拝場所をつくろうではなくて、そもそもは、日本の方にもっとイスラムを広めようという目的だったはずなんですけど、なかなかそれが機能してないのは、なんでなんだろうっていうのは、ちょっと課題といいますか。今、福岡にいる人間としては、何が原因なんだろうってのが思われるんですけど、なかなか本来の目的である日本社会にイスラムを広めるっていうために建

てた Masjid が、なかなか機能してない。そこは、ちょっと課題です。どうなんですか。他の Masjid のことはちょっと分からないですけど。どうですか、中村さん。

中村 古城さん、もしかすると、少し外れるかもしれませんが。一応、日本のイスラムの将来に向けてということですが、私、全然心配してないんです。皆さん、いろいろ現状に心配とか不安もおありかもしれませんが。基本的に、何度も話してる、長いスパンで見えます。500 年ぐらいのスパン。そうなってくると、今はまだ、耕しの時期。だから、雨が降ろうが風が吹こうが、まずやんなきゃいけない。

これ、よく仏教とかでいうんですけど、仏教東漸といって、ずっと西から東へやってきて。日本こそが一番いい仏教の土地だというふうにいわれるんです。私自身は、日本こそ、イスラムにとって、最良(?)の土地だという気がしてます。

これ、前野さんが言われた我欲心配ってところの問題なんですけど、正直言って、外国人ムスリムは我が強過ぎます。嫌なぐらい我が強過ぎます。私が入信したときに、アシュハド・アン・ラー・イラーハ・イッラッラー。これは、私がないということですかって言ったら、この動詞は必ず私が入ってるから、私は必ずあるっていうんですね。

でも、私自身が育った環境からいうと、人間の我こそ、不幸の原因だっていうふうにいわれてるんです。我をなくすためにはっていうことを考えたら、まさにイスラムですね。神に全体的に帰依することです。言われたことに、不服、不満を持たずに従う。それこそ我の戒め(?)だと思うんですけども、外国人ムスリムは、どうしても我が最前線に出てくる。そういうふうなこともあって、外国人と一緒にやると、すごくいつもトラブルが出てくる。多分、Masjid、その最前線だったんです。と思います。

一方、ちょっと視点を変えてお話します。イスラムの将来は何にかかっているかという、日本における日本人の再生が役割だと思ってます。なんでモスクに来るかって、みんな悩みを持てます。学生はちょっと違うかもしれませんが。そういう人たちはいろんな所において、最終的に、Masjid 来る方が多いんです。

そして、ボーンムスリムの優しさに触れて、入信される方が多いです。ただ、その優しさは行き過ぎて、窮屈になる場合が多々あるということです。私自身として、日本のイスラムの将来はすごく素晴らしいと思います。日本が、失ってるもの、あるいは、失いかけてるものが、イスラムの文化の中にあります。宗教の中にあります。これを、前面に出していけば、日本人にはすごく居心地のいい場所になると思います。イスラム。そういう意味で、私はすごく個人的には、素晴らしい将来があるだろうなと思ってます。ただ、増えるか増えないかは別です。

古城 すいません。また私なんですけど。多分、ボーンムスリムの方たち、日本にご自身がいらっしゃった方たち、経験されてると思うんですけど、日本人の振る舞い、ビヘイビアは、かなりイスラムだと思ってる皆さん、びっくりしたんじゃないかなと。びっくりし

たという話をよく聞く、あちこちで聞きます。

なんで、クルアーンがない国なのに、こんなにビヘイビアがイスラム的な、イスラムなんだらうという話を聞くんですけど、イスラムは、イスラムの中で美しいと思ってる考え方と、日本人がもともと、昔の日本人。今の日本人はちょっと、残念ながら違うんですけど。昔の日本人が、日本の伝統的に美しい、大切だと思ってたことってというのは、90パーセントぐらいマッチしてるので、今、中村さんのお話の日本人の再生。英語ではなんて言うんですか。リバース。再生が、とても、そこ、イスラムで大切にしていることが、日本人がもともと大切にしていることと同じなんですよ、ということをごんごん分かれば、もっと日本のイスラムっていうのは広がるんじゃないかなというのは、確かにそう思います。

店田 ありがとうございます。ハールーンさん。

ハールーン 問題はですね、日本人とか外国人とかそういう問題ではないかと思えます。100 ぐらいのマスジドがあつて、大体のマスジドがつながりがあるんですよ。みんな、団体が別々だけど、みんなお互いに。私も大体のマスジドの代表たちと仲いいわけですよ。

私の経験で申しますと、そこは団体、マスジドに日本人の理事がないとか、代表が日本人じゃない話になると、みんな待ってるんです。日本人のムスリム、または日本で生まれて、きょう、午前中、例えばジャミールさんの息子だとか、アリアンくんですとか、パキスタン人だけど、日本の学校出て、日本人と同じですよ。そういう人たち、前に出てくれば、みんな歓迎するんですよ。だから、このマスジド外国人がやってる、そういうこと言わないで、取りあえず、私が日本語分かるから。夕方行って、一つのハディースでも、アラビア語、誰か読んで、ウルドゥー語、誰か読んで、日本語、誰か訳せば、そうすると、それから活動に、こういうことやれば日本の社会が簡単に受け入れられるとか。

言いたいのは、日本人とか外国人の問題じゃなくて、やる人です。前に出て、地域の近いマスジド行って、やる気持ちがあれば、いろんなチャンスがあると思えます。これは、これから増えるんじゃないかと思うんです。

だから今、若い人たちが、海外、勉強に行って、イスラムの国行って、戻ってきてるわけですから、その人たちがうまく使えば、非常にいい機会になって大体、近い将来、5年とか10年以内にいろんなマスジドの活動、それから日本語の説教ですとかスピーチとか、それは変わってくるんじゃないかと私、気がするんです。

店田 林さんのほうから。

林 アッサラーム・アライクム。私は、17年ちょっと前に入信して、ずっと日本で生活してきてるんですけども、今いろいろかかっているいろいろな思うところがあるんですが、私自身の経験を申しますと、最初、私はアメリカでムスリムなって、日本に戻ってきたので、日

本でやっぱりムスリムの友達とか欲しいと思って、ムスリムに会うためにマスジドにも通いましたし、ムスリムの集まりにもいろいろ顔出したんですね。でもやっぱり、すごくいろんな意味で居心地が悪くて、どんどん離れてって、結局、最終的には何年もムスリムの集まりには顔出さないみたいな状態になってました。

別に私の場合は、1人で礼拝もして、断食もして、別にそこに特段、問題生じなかったなって、自分では生じてないなって自分では思ってたんです。ジューマにも行かなかったんですけど、YouTubeでレクチャーとかは見てる、みたいな感じで、なんとなく自分のペースでやってる、みたいな感じのことは続いたんですけど。

それでやっぱり、それはそれでもったいないのはもったいないと思うんです。それだけ、日本にはムスリムがある程度的人数いて、だけど全然、日本で1人ががんばってるみたいなものってあんまりよく分からないじゃないですか。で、その原因を考えたところ、やっぱり、外国の文化とイスラムが、その区別がついてない人が圧倒的に多いわけです。マスジドに行くと、で、マスジドに行って、特に入信したてのムスリムだと、ちゃんとやらなきゃっていう意識がすごい高いじゃないですか。イスラムではこうだからって言われたら、それ従いますよね。そういうことを言われ続けて、でもやっぱり、何か違うなってのがあるわけですよ。これ、本当にイスラムなのか、みたいな。

それでやっぱり、自分で調べて、そこは文化なんだとかいうところもありますし、結局、そこは窮屈になっちゃうわけですよ。ごめんなさい、一瞬、頭飛んじやったんですけど、マスジドに行かなくなったもう一つの理由としては、ムスリムの人の非イスラム的な行動があまりにも目について、なんですかね。日常生活、日本で生活してる分には不快感を覚えないみたいなのに、日本ではあり得ない非イスラム的行動が、マスジドの中では行われてるみたいな。そういう状態で、なんでこの人たちと私は付き合わなきゃいけないの、みたいな気分になってきちゃうわけです。ノンムスリムと付き合ってるほうが、よっぽどイスラム的な自分でいられるみたいな。

前野 さっきのしがらみマスジド最前線みたいな。たまらないですよ。

林 そうです。まさに。特に今回、出席者って女性、私だけですかね。

店田 そうですね。こちらでは。

林 皆さんは、女性フロアは多分あんまりご存じないと思うんですけど、女性のフロアは、多分、男性とは全然違うんだと思うですよ。私も男性のフロアはよく分からないのであれなんですけど。外国人のムスリムはいます。ムスリマさん。

彼女たちは彼女たちでやっていて、日本人の奥さんたちがまたいて、奥さんたちは、もちろん人によりますけど、旦那さんから聞いたことを丸のみにしてる人たちがやっぱり、

圧倒的に多くて、そうするとその国の文化がどっさり入ってきて、お互いみんなよく分かってないのに、いや、違う、これはこうなんだ、とか、これはこうするべきなんだみたいな話をずっとして、揚げ句の果てに、自分たちは日本人っていうのを結構棚に上げて、他の日本人は、ムスリムじゃない日本人は、カーフィルだ、みたいなそういう話とかし出しちゃったりとかして、本当に意味が分からないみたいな。そういうことがあるので、何が言いたいかっていうと、そういう環境が、日本人ムスリムが来ても去っていく理由かなっていうところなんです。

店田 ありがとうございます。いろんな重要な問題、非ムスリムの振る舞いであったり、カーフィルという話が出ましたし、外国の文化バーサス、イスラムというふうな話もですね、ありました。西澤さん、今のお話聞いて何かございますでしょうか。

西澤 いろんなモスクへ行く機会あるんですけど、やっぱり、文化っていうのはしみついで、それを出すつつたら出せないんです。これはやっぱり時間かかる問題で、これから次世代の人たちが来て、だんだんお互いに分かり合っていくっていう形で解決して行くと思うんですね。

そういうモスクの隣人との問題もあるし、言葉の問題も、話してあげると、あっそういうことだったのか。やっぱり、あっちはすごい怖いんですね。そういう、なんでこれやってんのか。それを、次世代の人たちが、もちろん、日本でイスラムを学んでる人たち、改宗した人たち、そういうこと説明していけるので、だんだんと解決していくんじゃないかなと思うんです。

大事な的是お互いのコミュニケーションで、誰が悪いとか、これとか、それもしょうがないんで、彼らが来たときに、もともとモスクなかったし、彼らができることは彼らががんばってモスク建てたとか、いろいろそれなりにやったんで。自分たちで、今、例えば自分たちの年代で今からモスク建てようっていったらすごい難しい。ほとんどの人たちが、お父さんの世代は社長とかで、お金もあって、こうやってモスクに寄付もできるんですけど、自分は普通に働いてるので、モスクに、じゃあ出してくださいつつたらなかなか出せないです。

彼らがやってきたことは、これは、すごい大きな実績であることは間違いないんで、お互いに、例えば改宗したムスリムを今度どうやってサポートしていくかっていうことで、若い、日本語を母国語とする、日本人ムスリムが必要なんです。海外の文化というか、どうしても入ってきちゃうんで、すごい助けてるつもりが、かえって嫌がられるというか。そういうのあるんで、そういうの間に入って、こっちはこういう気持ちでやってるから、別にわざとじゃないよっていうのを教えてあげたり。コンタクトもすごい大事で、パキスタンとか、バングラデシュとか、そういうそれぞれの国のお互いすごいつながりがあるんです。誰かが亡くなったらすぐ連絡来て、誰々のお母さんが亡くなった、モスクでそれ、ア

ナウンスするんです。

でも、日本人ムスリム、誰か亡くなったら、それは連絡ないんです。彼らは、もう病院入院してるよとか、危篤状態だよとか言われて、全然その情報が入って来ないんです。それじゃあ外国人がどこまでやるかっつたら、そこまでできないんです。そこはやっぱ日本人ムスリムが、もっと、コミュニケーションというか、つながりを強くしていくことが必要だと思います。モスクから、入信した後に、その後、どういう行動するか。その後に、そういう日本人ムスリムが入っていくことで、だんだんとうまくいくんじゃないかと思います。

店田 はい。じゃあ、アキールさん。

アキール アッサラーム・アライクム。今ですね、私が日本にいたのは、長すぎて、それでちょっと良くないというふうな話を、なんかすごいね。ものすごくマイナスな話ばかりで。私たちが来たころは、1963年なんです。そのとき、ハールーンさんから出たのは、1990年来たころの話だけれども、モスクは一つしかなかった。それで、あったやつは壊された。そのときは、どういうふうにしたか、どうやってみんなモスクにしたか。どういう思いでできたのかということ、だんだん時代によって、薄くなってきたんですよ。

新しいモスクに入ってきて、これもう当たり前だ、できてるんだもん。それは、こうあるべきだ、こうあるべきだという、みんなもちろん注文ありますけれども、考えなきゃいけないのは、あの時代に、イスラムを守るために努力する必要があったんです。今でもありますけれども。

そのときは、誰がモスクに来て、何をやってたかということは、今の人は流れが分からないかもしれない。シャヘレヤール君が言ってるのは、少し、彼がちゃんと状況見て、それ言ってるんですけど、それが、この時代からちょっと、私言ってみたいんですけど、これ、歴史が、日本でイスラムの歴史がものすごく浅いですよ。だから、時間がかかれば、だんだんいろんなものが直ってくると。

今は、アメリカとか、イギリスの例を言うと、そこが歴史が100年ぐらい近くなってくるんです。そこは同じパキスタンとか同じインドとか、同じバングラデシュの人たちがいて、生活して、それで、そこでイスラムが、今までの成長したわけです。日本は、せいぜい、一番最初に来た人は、1905年なんです。その人も1人だったんです。1人で出て、それを旅行者として来て、何日間で帰ったわけです。モスクつくろうとか、他の人を、イスラムを広げるかということまではなかった。

それで、1930年から35年ぐらいは、ロシアのレボリューションがあって、それでトルコの人たちが来た。そのときは、まず神戸モスクができて、その後、それから名古屋にもモスクができ、東京モスクができた。名古屋モスクは、1941年か1942年ぐらいに、火で燃えた(正確には、1945年)。そういう時期だったんです。

それから一番、関係が続いたのは、日本人は、1973年、74年のオイルショックだったんです。その時期、やっぱり、アラビア語を学ぼうと思って、アラビア語習えば景気が良くなると。中東へたくさんの人たち、日本人が行きました。それで、景気が良くなるということをやったんです。そのおかげで、モスクの人たちも来しました。

それから実際に数が増えたのは、1985、1986年なんですね。あのときは、労働者が中東でたくさんおりました。みんな若い、日本に仕事探しに来た。これ、1990年ぐらいの話なんです。だから、そのときはたくさんモスクつくられました。

そういうときは、結局、10年から20年間、モスクを作る話。あのときは、まだ教育の話するとか、子どもたちどうするかということをもたなかったわけです。それが、始まったのは恐らく1990年以降の話なんです。

今は、じゃあ子どもたちどうしようかと、どうやって教育するのか、どうやって私たちイスラム残していけるのかと。じゃあ、私の子どもはパキスタンに送りましょう。私の子どもはバングラデシュに送りましょう。私の子どもはドバイに送りましょう。

そのときも、やっぱり、その行動は、本当に将来のこと考えないでやったことだった。3年から5年ぐらいたつと、子どもたち、親から離れて生活するといいいことはない。生活しにくいと、逆に日本で困ると。戻ってきました。

そのときはもう、幼稚園の子が小学校行っちゃってるわけです。そのときは、そういう人がやると、小学校作りましょう、幼稚園作りましょうっていう話が上がってきた。その前にモスクに行って、アラビア語とかイスラムの勉強とか、そういうことさせた。そういうことは、時間がたって少しずつ良くなってるんです。

今の日本は本当にすごく(聞き取り不可)の時代なんです。ここにいるムスリムはみんなよく理解してきたわけです。それはもちろん、モスクで日本人と外国からのムスリムと、フリクションがある。文化の違いがあると。そういうことがある。

だけど、それは時間によって解決する問題であって、今、私たちが、ここで考えなきゃいけないのは、どうやってお互い仲良くなって、どうやってイスラムをもっと良くするかという時代なんです。

もし、私がモスクへ行けなくなっちゃったと。関係が良くないと。だから、もうこれから行かないと。これはマイナスなことなんです。これだったらもちろん困ります。だから、モスクを管理する人たちは責任が重大にあります。

私がよく覚えているのは、大塚モスクつくったときに、イマームはいないと。誰がイマームなるか。そうすると、3カ月ごとに、パキスタンから輸入してました。なんかして、日本人のいないのかと。みんな日本ムスリム協会の方にも声掛けて、もう皆さんアームだったら、もう少し前に出てくださいと。なかなか出てこない。みんな忙しい。会社で働いてるからできない。そういうの続いたわけです。だから、ラマダンのときに、外国からイマームをタラウィーに呼んでた。

だけど、それは昔の話。今は、アルハムドゥリッラー。いろいろなモスクで、日本で生

まれた、日本で育ったイマームがいるか、いる予定になるか。もうすぐになる。おそらく、あと、5年たてば、イマームの輸入の必要がなくなってしまう。10年たてば、もっとアーリムの必要もなくなってくる。今はそういうものがないんですから、日本で。ないんだから、それを認めてください。ないことは事実なんです。それは、イマーム・ガザーリーとかの名前知ってる人は、何人しかいないんです。その人たちのイルムがどれくらい広いかということです。だから、やっぱり、もっと待ってください。もう少し待って、がんばっているイスラムの人たちを育ててください。そうすれば、近いうちにインシャーアッラー。

店田 ありがとうございます。いろいろ、浜中さんのほうにお願いしようと思って。

浜中 何もしゃべらずに座ってたんで、みんなとはちょっと状況が違う場所ですけど、僕がいる四国の状況を紹介させていただきます。僕は、日本のマスジドについてちょっと話します。

マスジド運営するのが一生懸命みたいな新居浜なんですけど、例えば、ジュムアの礼拝は、来るのが大体6、7人くらいですかね。日本人3分の1、パキスタン人3分の1、あとはマレーシア、インドネシア人みたいな感じですね。

僕がイマームやっていますから、もちろん全部日本語で連絡もやるし、フトバを日本語でやることもあるし、アラビア語だけでお決まりのことを読んで、やることもあります。時間が限られていますので。5分ぐらいでやるっていう。

そんだけ少ないと、1人欠席するとできないこともあったりするので、必ずみんな出席するように。欠席したら、次の週におまえなんで先週来なかったみたいな感じで。そしたら、結構、みんな来んといかんと思ってやってくるんです。僕ら、マスジドそういうふうにはやっています。

ところが、金曜日が休日のときのイードの礼拝が1回あったんですけど、100人来ました。そんだけたくさんの方が、近くにいるのかと。ほとんどが、インドネシア人の研修生ですけどね。研修生はジュムアには来れないんです。だから、数もそんな入らないですけど、インドネシア人はほぼゼロに近い状態でジュムアはやっています。日曜日が、休みがイードになったときは、そんだけたくさん来れると。それと、日曜日に、僕もいつも考えてるんですけど、なんとか日本人に集まってもらいたい。

それと、一番考えてるのは、マスジドの有効利用なんです。空のままにしてたら、もったいないんで、日曜日使える人がいたら、いくらでも使ってくれってことで、インドネシア人の研修生の勉強会とか、マレーシア人の集まりとか、誰でもいいから使ったらいいよと。日本人も結構来て、国際交流みたいなイベントやったり。なんでもいいから使えよってことで、やっております。

さっきも言ったような、どうやってして日本人をつれてきたらいいかっていうんで、日本人のムスリム、例えば愛媛県で見てたら、大半が国際結婚しています。どこまでのレベル

の人かっていうのは、それぞれのこと分からないんですけど、率先して Masjid に来て、礼拝しようとか、日曜日勉強会するからっていったときはもちろん来ないです。勉強会するときには、自分の奥さんをつれてきて、もうちょっと見ませんかって言ったら、ちょっと用事がありますって必ず帰るってというのはそういう状況なんです。

たまたま、日本人の勉強会みたいな感じで、そういうご主人がたが日本人、あるいは逆に、奥さんがたとか、みんな集めて、日本語で、イスラムのこと話したりしたんですけど、やっぱりなかなか続かない。良かったですんで、次になかなか来ないとかいうのがあったんですけど。ところが、最近になって、ちょっとイスラムのことは彼らにはしゃべらずに、とにかく勉強会じゃなくて、食事会だけで集まろうということで、具体的にどんな内容か言って、結構いいなと思ったんですけど、1 時間のコーランの勉強を今、インドネシア人がやってますけど、コーランを読むだけですから別に他の民族の人来てても問題ないんですね。大半がインドネシア人ですけど。

僕が、たまに先生やったり、大半はインドネシア人がイマームやるんですけど、それで集まったり。1 時間ぐらいで切り上げて、あとはみんなで食事する。その中に最近、日本人ムスリムも来るようになりました。コーランの勉強会のときは、適当に後ろのほうで聞いているだけで参加できないんですけど、とにかく食事会になったら、それぞれ楽しく話しましょうということでやってたら、ずっと続けて来るようになったんです、配偶者の日本人の人が。こりゃ、いいかなと思って、これから先どうなるか分かりませんが、最近そういう傾向が出てきまして、日本人のムスリムの人も来るようになりました。雑談でやると。

何か、Masjid を利用するということを目標に、なんでもいいからとにかく呼んできて、イベントをやっとけば、いつの間にか人間のつながりが、イスラムの知識を上げるとか、信仰心を上げるとかじゃなくて、みんながつながりを持つだけでもいいのかなと。ジューアの礼拝だって、みんな必死になって、自分が行かなきゃできなかったらいかんと思って来てるわけですし、勉強ばかりだってね、楽しいから来てるのかなと。数もだんだん増えていってます。

最初は、コーラン勉強会 10 人だったんですけど、先週は 30 人ぐらい来て、毎週楽しみで来てるみたいです。そういうのやり始めると、つくる側も大変なんで、あれ持ってこい、これ持ってこいってみんなで役割分担して、そういうので、なんとか続いております。

それと、外国人と日本人とのって、新居浜 Masjid の場合は、圧倒的に僕が 1 人でなんでもしゃべりますんで、他の外国人口出しができない。困ったときには、浜中さんこれってどのように意見が割れるんですけどってというのは、インドネシア人の中で意見が割れて、法ではこれが駄目だとか、これがいいっていったときに、どうですかっつたら、それ駄目ですか、それ OK ですって僕が言えば、それで決定するみたいな、今はそういう状況で、僕に対抗する人は誰もいないんで、安心なんですけど。

前野 アラブやパキスタンの人いませんか。

浜中 おりますよ。

前野 パキスタンでも抵抗できない？

浜中 なにも(?) いかないです。

前野 数が。

店田 アキールさんから、あるいは浜中さんからのお話も、いずれにしてもこれまでのコミュニティっていうか、マスジドをつくり上げてきた世代の方がここに今、たくさんいらっしゃるって、そういうものが成果としてあるのは確かなことなので、それをこれから継承していくっていうか、そういう時代にこれから今、入りつつあるというのもまた確かなことはありますね。

そういう中で、外国人と日本人の問題とか、あるいは、外国の文化とイスラムとか、いろんな問題をこういう場で取り上げて話し合えるような機会ができているというのも、いいことだと思いますので、ぜひこういう、ここでもっと話をしていきたいということで、ターヒル先生のほうから。

ターヒル すみません、私は日本語はちょっと、良くないので、ちょっとがんばります。

私は、二つのこと話したいと思います。まずは、別府のモスクの今、いろいろな他のモスクよりちょっと違うことした、それまず話したいんですけど、私たちは、ブディストのお寺さんと一緒に、いろいろなプログラムをやっています。それで、イスラムインお寺というプログラムをして、私たちはまず、向こうの近くの中津市という市に行って、向こうのかたがたに、イスラム教のいろいろな集会をしました。

その後は、2カ月間ぐらい前は、別府マスジドはフードフェスティバルをしました。そのフードフェスティバルの、私たちは、毎年それをしますけど、そのときは、イスラム教の紹介はイスラム教の人じゃなくて、お寺の神父さん。彼が、イスラム教の紹介をしました。それが、多分、私は(聞き取り不可)のは、多分、今までは多分、初めてです。

私たちは、全部いろいろな、例えばフードフェスティバルにいろいろなイスラム教の国のフードを作って、来たお客さまにあげて、でもレクチャーは、このブディストモンクはそのレクチャーをしました。とてもいいレクチャーしました。まずは、彼の言葉も日本語で、あとは、ヒストリカーとてもいいこと、彼が話しました。それは多分、将来的にも私たちがそれを伝えると思います。1年間に2回。1回は私たちはお寺に行って向こうの日本人にイスラム教の紹介と、あとは、ブディストモンク、神父さんは、私たちのプロ

グラムに行って、イスラム教のために話しますと思います。

あとは、私たちは、ラマダンのときはフリーフードも、もちろん、それ他のマスジド、日本やっています。フードは多分、仲良くするためにとてもいいことと思います、私は。コミュニケーションするために、イスラム教のスコラーのレクチャーじゃなくて、普通に一緒に食べたり、話したり、多分、そのほうが一番、ラマダンのときには何人か来ます。日本人も何人か来ます。それで、そういうラマダンだけじゃなくて、後でも続けたほうがいいと思って、2年間か3年間ぐらい前から、毎月、第1と第3の金曜日の夜、モスクにフリーフードがあるんです。それはもう、誰でも行って、食べて、そのとき、レクチャーとかないです。呼んでないです。フードだけです。それでも何人か、来ますと思います。それが、そういうのないと、いろいろなそういうようなプログラムを私たちはやっていますけど。

あとは、イスラム教の将来ですか、それは、どういうになりますか。将来のために話すときは、ちょっと昔はどういうふうに行っているか、それちょっと見たほうがいいです。それでも、将来的にはどういうふうになりますか、その情報が、それでもできますと思います。

私は、2001年に日本に来ました。そのとき福岡にいて、モスクは、九州は全然なかったです。その後も、一番近いモスクは、そのときは多分、神戸モスクでしたと思います。今は、九州とか、近くの広島とか、どこでもモスクが今、やっています。

あとは、私たちは九州に、例えば福岡、別府とか、その後、熊本とか、そのモスクするときは、熊本の人だけじゃなくて、私たちは九州以外の人、みんな集まって、そのためにがんばりました。そのいろいろなモスク。それで今、九州にももちろん、モスクがいっぱいですが、でも、みんな別々のコミッティー、モスクのコミッティーが別々ですが、でも、ビジョンとか、それがみんなちゃんとして、そのようにやっていますと思います。

それで私の意見は、例えば今は、日本には少なくとも100ぐらいモスクがあって、それより150か200ぐらい、いろいろな、今はムスリムオーガニゼーションがあって、ちゃんとコーディネーションとか、それが全然ない。どこのオーガニゼーションも、多分(#####01:19:43)reinventing the wheel。たくさんがんばって同じことをして、本当は、他の所に、それは、簡単でできます。

そのように、ジョイントビジョンがつくれば、私はそれもちょうと、リサーチもしました。なぜ、それは前はできなかつたか、という。いろいろな理由は、例えば、一つは、ちゃんとコミュニケーションがなかつたので、他のオーガニゼーションにコンフィデンスがなかつたです。本当に、するかどうか。

あとは、まずは小さいオーガニゼーションは、もし、例えばですけど、ジャパン・イスラミック・トラストは、結構前からおっきなオーガニゼーション。他の近くのオーガニゼーションは、私たちはちっさい。もし、一緒に大きなコミュニティになれば、多分、この大きなオーガニゼーションはそれをコントロールします。というのが、そのような問題が

あったんです。それで、例えば、私は一つの全国のオーガニゼーションは、つくるのは多分、難しいと思います。それ、多分、今の場合ではできないと思います。

でも、もし地域的にディファレント、ジオグラフィカリー近い所は、もし、8から10オーガニゼーションが少しずつ、一緒になって、その所の、自分の例えば、5年後のビジョンとか、それぐらいつくって、あとはそのオーガニゼーションのリーダーシップは、それが一番の問題です。誰がそのリーダーになるかとか、リーダーシップは、ロテートする。毎年別の県とか市とか、それに変わって、多分、そのフィアー、大きなオーガニゼーションは、小さいオーガニゼーションにコントロールするか。それも多分、なくなりますと思います。それでも、このような小さな8から10にリージョナル・オーガニゼーション、それつくって、少し、働いて、その後、将来的に今から5年間後は、その10年間のリージョナル・オーガニゼーションから、一人一人の選んで、多分、全国のオーガニゼーションは、できますじゃないかなと思います。

それでは、私たちの今、パラレル、同じ仕事をパラレル、100の所にするより、もし、一つの所だけでそれすれば、同じエフォートで、多分、リザルトが、何倍増えます、じゃないかなと思ってます。

店田 ありがとうございます。全国のまとめるような組織に、今の段階ではないわけですが、ターヒル先生は、地方ごとに八つから十ぐらいの地方ごとの組織をつくって、今はやって、将来的にはそれが一つになっていくような形がいいのではないかと、そういうふうなお話でした。そういう全体のモスクネットワークというか集合組織、そういう話も以前からも、いろいろ話題になってました。

はい、古城さん。

古城 はい。ターヒル・バイの話は、私はとても、アグリーなんです。なんですけど、私はものすごくアグリーなんです。自分の仕事、行政書士という仕事をやってるので、まず、いろんなグループをつくるとか、宗教法人のお手伝いをするとかっていうのは、ご相談をたくさんもらうんです。福岡でも今、箱崎、東区にあるけど、西区に九州大学が移転したので、西区でグループをつくるとか、あるいは北九州でグループをつくるっていう相談を受けたときに、箱崎のマスジドのランチでつくったら、とても簡単でしょというアドバイスをすると、返ってくる返事が、インディペンデントがいいとかいう返事が来て、私は、原因はコミュニケーションがないからだと思うんです。コミュニケーションがないから、やっぱり心配なんだと思うんです。インディペンデントじゃないことで、いろいろターヒル・バイがいうようにコントロールがされるんじゃないかっていう、すごく心配なんだと思うんです。そこのクリアを一生懸命、間に入ってヌルディーン(?)だとか、他の人とかと、もっとコミュニケーションとって話話、つなごうとは、一生懸命リレーションをつくらうとはするんですけど、なかなか今のところうまくいってないんですけど、ちよっ

と、インシャラー、がんばります。

店田 今のところ、昨年、鹿児島の方が来て、鹿児島のマスジドが福岡のマスジドに、という話をされてたんですけど、それは結局、今は実現してない？

ハールーン いえ。もう支部になってます。

店田 なりました？ はい。

ターヒル それで、そのプロブレムが、もしリーダーシップが毎年変わりますと、皆、安心と思います。

古城 そうです。例えば、今の話でスタート、福岡の中でも今、3つか4つって話に、まだできてないですけど、なったときに、まず、福岡の中でもトレーニングが、とか、九州の中でもトレーニングができて、もっときれいになったら、すごく良くなるだろうなどは本当に思います。

店田 ありがとうございます。前野さん。

前野 マーシャーアッラー、ジョイントビジョンみたいなのが最高ですね。素晴らしいと思います。私個人、将来的な、理想的な日本でのムスリムたち、あるいは、ムスリムのコミュニティの形ってというのは、本当に、各界で、さまざまな分野で活躍する、日本語を母語とするムスリムが増えること。加えて、日本語を母語とする学者、教育者たちが増えること。その中で、せっかく皆さんで、最後、アキール先生からプラスの話をしましょうっていうことで、だんだんと温かい良い日になって、もう終わるべき時間なんですけど、もう一度、暑い日にしてしまいそうで恐縮なんですけど、もう流れてない話なので、後進のためにしても良いかなと思うので、させていただきます。

先ほどの、コミュニティの運営にも必要不可欠なインディペンデンス、独立性っていうこともそうなんですけど、スカラシップ、イスラムのイマーム、指導者としてのインディペンデンスも、本当に必要不可欠な話として、訴えたい。訴えておきたいと思います。

というのは、以前の会議でもお話したと思いますけども、残念ながら今の、現在のたくさんさんの、恐縮ですけど、インド亜大陸系が主流の礼拝所だったりといった所の運営、そこに雇われているイマームさんたちというのは、母国で雇われてるイマームさんの扱いと同じです。ほとんど。なので、言葉は厳しくて申し訳ないんですけど、残念ですが、三流サラリーマンです。

もし、日本人が、日本で、皆さん人件費が一番かかるのは、よくご存じのとおりと思い

ますが、日本人が、本当に、だからさっきのハールーンさん、本当に、問題は日本人とか外国人とかじゃないのは、重々分かってます。各地で、日本人がリーダーシップをとるの、待っているとかが言われますけど、本当にそうですかっていうのが私の疑問です。口では皆さん、そう言いますが、本当にそうですかと。実例として一つですから、後進のためにご紹介したいと。

ある地方の大きな masjid で、私が イマームとして迎えられるチャンスというか、機会がやってきたときがあります。そのスポンサーをしている、ある国の上層部、偉い人に、その国まで飛んで行って、実際に会って、気に入ってもらえて、じゃあ任せるっていうような感じで、それから地ならしといたしますか、実際に日本に戻って、それを進めるべく動き始めた矢先、つまり、私も進め方がまずかったに尽きるんですけど。

私としては、信頼していたはずの、そのある masjid の運営委員会の人に、その事情をお伝えしたんです。そしたら、あろうことか、その運営委員会の場で、なんといいいますか、嘘をつかれまして、私が言ったこともないことが言われて、流れてしまいました。

何かというと、私の過去があまりにブラック過ぎるからかもしれませんが、経験上、masjid に勤めて、代表者の意向で首を飛ばされたっていうことがあります。なので、独身であるときには構いません。別に、冒険いつでもしても、独身ならば、問題ないでしょう。でも今や所帯持ち、家族 6 人を養っていかなきゃいけないという身で、そんなふうに代表者の意向で首を飛ばされたらかないませんから、少なくとも、私のそのときの唯一の希望は、シューラという諮問委員会です。masjid を運営する運営委員会のメンバーには必ずしてくださいと、お願いですから。翌日行ったら、おまえは首だから、それじゃ生活できませんから。なんです、あろうことか、私が事情を打ち明けた後、アハマド前野は、諮問委員会になるのは自分だけで、他は誰もいらぬ、そうやってたのたまわれたようなんですね。ラーハウラ・ワラクツワタ・イッラービッラー。

どうしてそんなことが起こったんでしょう。それは、そこにはすでにイマームさんがいるんです。イマームさんがいて、結局、彼らは、日本人のイマーム歓迎しますって言うけど、その人に居続けてほしかった。その人を残したかった。

だから、こんな話もしたんです。してこられたんです。アハマド前野は、日本人のダーワ向けに、日本人の伝教向けに来てほしいと。でも、他のイマームとしての礼拝導師として、masjid のいろんな指導者としては、今いるイマームと、要は、一緒にやっていってほしいと。でも、アハマド前野にはスポンサーが付いたから、彼らには、それがうまくいけば、万々歳な話だったわけです。

でも、そこは残念ですけど、あまりにも方針が違い過ぎる 2 人でしたので、それは申し訳ないですけどできません。そんな同じ masjid にいながら、顔を使い分けるのは良くないと思いましたので、そんなことはできませんってことになったら、そういう結末になってしまっていて、結局、そういう話はなくなってしまったわけですけど。そのような形で、何が言いたいかといいますと、要は、本当に日本人に、masjid での活動で、リーダ

ーシップをとってもらおうと思ったら、待遇です。家族を養っていけるだけのきちんとした待遇を確保できるのか。それから、独立性、インディペンデンス、なので、これまでの会議でももめたことあるかもしれませんが、ワクフ、独立財源の確保っていうのは必要不可欠な課題だと思います。なので、そういった地域統括共同体、先ほどのような、地域別なグループで、そういったビジョンを持って、共に進めて行く上で一考に加えていただければ幸いです。ありがとうございます。

店田 ありがとうございます。もう時間が限られていて、礼拝の時間もあるので、ちょっと簡単に。もし、お願いできれば、西澤さん、今、前野さんからお話になったことについて、ご意見があれば、ちょっとお願いできれば。

西澤 僕は、そういう海外から来るイマームは、本当に、同じレベルじゃなくて、いろんなレベルがあって、私は呼ぶほうに、呼ぶ側にちょっと問題があると思うんです。個人間で呼んでるんです。イマームというの。何か機関を通してとかじゃなくて、何か、マドラサとかとおして、お互いのつながりがなくて、ただ誰々の友達かなんか、きょうだいの弟がアーリムだから彼を呼んでこようとか、そういうことがあって結局呼んできた後に問題になっちゃうケースがあるんです。

呼ぶ側としては、イマーム呼ぶときは機関を通して、どっかのマドラサ、どっかの大学を通して呼ぶことで、その彼も自分は大学とか、マドラサの代表だと思って来るんで、そういう余計なことはしないと思うんです。

あとは、前の会議のレポートとか読んだことあるんですけど、イブラーヒーム・大久保さんがお話してたんですけど、そういう若い人たち向けに努力するのが早い。日本人は、1人の改宗した日本人を育てていくためにはちょっと時間がかかる。イスラムの勉強をして、その後、いろいろ、もちろんそれも同時にやらなくちゃいけないんですけど、若いムスリムだったら、ある程度ベースができてるんです。信仰心を持ってるとか、ある程度の知識は踏まえてるわけなんで、彼らを指導してくことで、彼らをそういうリーダーとしていくことで、これからそういう日本人の気持ちも分かるし、外国人の気持ちも分かる、その間になってくれる存在になると思うんです。

僕たち、自分はタブリーグ運動やってるんですけど、大体 2011 年に始めて、そういう日本人だけのそういうジャマートで行ったんですけど、そのとき 6 人だったんです、メンバーが。今は、大体 50~60 人いるんです、メンバーとして。ほとんどが、日本人とハーフと、あと、そういう、ほとんどしかも、高校生、大学生とか、そういう社会人の人たちがほとんどなんです。小さい年齢より、ちょっと大きくなった年齢の人たちがほとんどで。

その中で、やっぱり彼らはそういう、海外のギャップを受けないように、日本式のやり方でやってるんです。例えば和食を出したり、話とか全部日本語とか、そういうのやっぱ味わえないんです。どこにも。やっぱ来る人も、そういう自分たちのこういう仲間たちが

いるっていう感じで、すごい好評というか、みんな行きたがってるっていうか、自分がそういう場所において、自分の言葉で、そういう、あと、自分の周りも同じ年齢で、あと日本語もいろんなこと踏まえて、すごい活動してて。今度、問題なのは、その子どもたちをどうやってもっと先のそういうレベルまで達していくかということを考えなくちゃいけないということが課題かなと。

店田 ありがとうございます。時間があれですので、ちょっと簡単にまとめではないですが、将来に向けてっていうことで、課題はソフトなものどハードなものどあるんですが、ソフトといえば、やっぱり人。外国人とか日本人、あるいは日本人ムスリムの中の問題とか、あるいは外国人ムスリムの中の問題、そして、今、西澤さんがお話になってたような継承ということで、やはり第2世代のことが、これから大きな課題ということになると思います。

第2部では、『若者世代とムスリム・コミュニティの課題』というタイトルにしてありますが、次の冒頭のところで、出席者の方には、次のような問いを投げかけたいと思います。あらかじめ言っておきたいと思いますが、例えば、これまで、第2世代に対して、それぞれの masjid、あるいは、個人的な形でも構わないんですが、どのようなケアを行ってきたのか。そして、第2世代について心配事ってのは一体何があるんだろうかってことが一つ。

それか、2番目として、これから行っていないといけないことは、どのようなことがあるのか。これが2番目ですね。そして逆に、どのようなことを控えなければいけないのかということ、逆の面。

もう一度申し上げると、これまでどういうふうなケアを第2世代に対して行ってきたのか。そして、心配事として一体どんなことをお持ちなのか。2番目として、行っていないといけないこと。それから3番目として、逆に控えておきたいようなこと。

こういうことについて、次の第2部の冒頭では、皆さんから、まず、お話をさせていただきたいと思いますので、ちょっと休み時間の間ですけれども、よろしくお願ひしたいと思ひます。

それでは、礼拝と、それから休憩。後ろにお茶、たくさんお土産をいただいたそうなので、お土産もたくさんあります。お菓子もたくさん用意してありますので、少し、お休みください。それでは、また、30分後ぐらいに再開したいと思います。ありがとうございました。

(第1部 終了)

第2部 若者世代とムスリム・コミュニティの課題

店田 それでは第2部の若者世代とムスリムコミュニティの課題のほうに移りたいと思います。ここからは司会を岡井君のほうに移して。

岡井 急に振られても困ります。

店田 午前の部会で。午前も実は、先ほど申し上げたように9時半から次世代部会ということで、若者世代とイスラム、日本ということで、3時間近く話を若い人たちを中心にして行いました。それを受けてというか、その参加者も含めてこちらに今、オブザーバーとしても参加していただいていますので、後ほど、午後の部会の参加者の方ともお互いにディスカッションできるかと思います。まず最初に、先ほど終了前にお願ひしました次世代に対する質問に対して、お一人ずつご発言をお願いしたいと思いますけれども。前野さんから。

前野 今度、反対にしませんか。

店田 反対にします？ 林さんはちょっと違いますよね。林さんに次世代のことを聞くのはちょっと。浜中さんからよろしいですか。

浜中 午前中にすごい、第2世代のかたがたが活発な意見を出してくださったみたいなんですけど、聞いてないからよく分からないんですが。ここに出席されてる方たちは相当すごいんだなと思います。マスジト側からしたら地域に住んでいる次世代の人たちをどれだけ導いていったらいいのかなってすごく問題が多いし、イスラムを伝える手段がないとか。まずマスジトができ上がったのが最近のことなんで、それ以前に生まれてた子どもたちにはマスジトとして伝えることができるのかという状況ですから、もう本当に親に任せられないというのが。都会のほう、どうだったかあんまり分かりませんが、四国みたいな田舎ではどうだったかという、本当に全く親任せで。

僕自身のことを言うんですけども、子どもが4人ほどおりまして、みんなもう大きくなったんですけど、モスクをやって僕自身も非常に仕事が忙しくて、子どもをほったらかしにしてたんですけど、母親がどんなことを教えたかだけに掛かっているんですけども。ちゃんとイスラムになってくれるかどうかというぎりぎりの線ですと残ってたんですけど、息子はびっくりしたのが全然イスラムのことをほとんど勉強してなくて、クルアーンも読めない長男が結婚するときになって「結婚させてください。イスラムにさせて結婚しますから」という日本人の女性連れてきて結婚して、おまえ、イスラムのことを意識してたんだと思ってびっくりしたんですけど。当然、ムスリムとして奥さんもイスラムのっていうんでイスラムに行つて。でもちゃんとじゃないんですけど、本人、大したこと知ら

ないんです。一応、自分はムスリムだっていう気持ちは持ってみたいですね。

ハールーン マーシャーアッラー

浜中 きょうだい、ほとんどそんなもんなんですけど次男が海外に留学しまして、イスラムのことをある程度、勉強しましたので、この子が救いかなと思っていろんな、僕から子どもたちに言うと結構、角が立つんで何とも言えないんですけど、次男が僕の代わりに長男や女の子たちにイスラムのことをずっと伝えていってくれてるっていうのはあります。それを期待するしかないんですね。今度、これからの第2世代も、四国は遅れてますけれども、その子たちにはもうちょっとイスラムをを伝えるなんかいい方法を考え出さないと、マスジド側として考えないといかんなと思ってます。そんな状況です。

岡井 浜中さん、ありがとうございます。続きまして大塚、永井さん、お願いできますでしょうか。

永井 アッサーラム・アライクム・ワラフマトウッラーヒワバラカートッフ。私のほうは妻がインドネシア人で、ちゃんとした勉強はしてないんだけども割ときちんとした家庭で育ったよう、要するに家庭でっていうよりも親戚一同を含めてですね。そういうことで基本的なものをある程度は知っているというような状況でしたから、それで当然、イスラムっていうのは守るもんなんだという母親ですよ。という母親が子どもを育てましたので、私は子どもってのは母親が育てるもんだと思っております。それで、おいしい物をあげるからちゃんと私の言うことを聞くんだよというようなことが基本なのかなと思うんですけどね。そういうふうにして母親に引きずられてイスラムから外れないような、心はムスリムであるということで育て、いずれももう40歳を超えてるんですけども、そういうことでムスリムとして自覚を持っては育ったと思います。

それで私の子どもを育てた時代というのは、海外から日本にみんなが小学生のときに連れて帰ってきたんですけども、当時は今と全然違ってイスラムのイの字も知らない先生たち、学校がほとんどだったということだったと思います。それから当時、例えば同じ給食を一緒に食べる、それが素晴らしい教育なんだっていうような時代ですよ。これが今はそうじゃない。特にアレルギーの問題があるもんだから、食事というものは別に強制してこれを全部食べなきゃいけないとか、そういうもんじゃないということがだんだん理解がされ、またそういうものが宗教的には帰国子女だとか、海外の子どもだとかそういう人たちも増えてきて、そういう人たちの中で穏やかに学校を説得してくれるような海外の人たちが子どもを学校へ入れて、それで学校の意識を変えていったということなんかと思うんですよ。そういうものが徐々に広がって、今では日本のほとんどの学校でイスラムとイスラムに対する主に給食ですね。そこまでは理解してるんじゃないかと。

あとは水泳の水着の問題がどうだとかなんかなってくると、いろいろと温度差があったり、親のほうにも温度差があったり、いろいろあるもんですから、なかなか統一したもので出てこないだろうと思うんですけども。そういうものの一つの表れとしてアジアゲームだとかあいうものを見ると、全身を隠すような格好でスポーツをやるようなんにこだわる国と、そうではないような国もあるわけですよ。そうすると何なんだっていうことで、多様であると素晴らしいですということがいいのかどうなのか。ともかくそういうことで、いまや、そういう過渡期の中に子どもたちが置かれて、ただ、だんだんいい状況の中にあるということは間違いないと思うんですね。ですから普通の日本の学校に子どもたちをやっても、主には給食ということになりますけども、何か対策があるような、家で弁当持ってっていいよとか、そういうようなことでやっていってもらえるというような時代になったと思います。

それであともう一つは、日本の学校で子どもたちが汚れてしまうんじゃないか、心が汚れてしまうんじゃないかっていうことでイスラムの学校を作らないといけないと。イスラムも教える、普通の学習も教える学校が必要だってことで、今、ぼちぼちとでき始めてるわけですよ。そういう所が果たしてペイしてるかどうかという問題が起こるわけですけども、将来考えれば当然、生徒もだんだん増えてペイするんだと思うんですけども、なにぶん海外の身近な所で学校で成功してる例っちゃうのはインドの学校なんですね。インド人っていうのはほとんどの人がサラリーマンで、学生じゃなく就職のために日本に来てるんですね。そうすると大手町辺りに職場構えてるから、初めに浦安の辺り、あの辺がいいよっていうことになるとみんなそこに住む。東西線に乗れば大手町すぐ行けて、家賃も安いってなことでね。そうすると学校作るのもリーダーがちょっといて、昔、NHK にいた人がリーダーになったようですけども、そういうインドの人で教育熱心な人が学校を作ってるというようなことがあって、非常にだんだん成長した学校ができ上がってきてるということです。

ところがムスリムの場合には必ずしも一つの場所にみんなが住むっていう条件、満たされてないもんですから、教育の場を作るっていうのが大変だし、それから作ったとしても親がまだ子どもが小さいうちは、幼稚園も含めて子どもを連れて来ないかんというようなことがあるもんですから大変だということですね。それでもこれから何とかそういう形で、今、でき上がってるもの、うまくいくんじゃないかなんかということとは私、思ってますけども。ただ一つ心配なことはありますけども、これは海外から来ている特にそういうものを一緒に作ろうとか、マスをドを作ろうとかいってやられたかたがた、こういう本当に信仰心のあつい、アッラーが何とかそれをしてくれるんだということを中心から信じて、そういうことにまい進してる人たちが、そういう学校を作ったりマスをドを作ったりして、今、状況があるわけですけども。何が心配かといいますとその第1世代なんです、実は。マスをドを作ったり学校を作ったりした。まだ第1世代で、その人たちがまだ健在なんですね。その人たちは自分たちが作ったんで、そこまでの熱心な人だから作ったんですよ。その人

たちが今度、次の人たちになったときに、同じ熱量の、熱心さの人たちが引き継ぐようなちゃんといくんだろうかっていう。ですから今、日本中に masjid がたくさんできて大喜びしてるけれども、これが果たして次の世代に、次の人っていったちゃんと維持管理やってくれるんだろうかっていうね。そこんところが心掛かりですけども、ただこれは信仰心次第っていうことで。

先ほどからの話を聞いていると海外から来た人、本当におせっかいなほどに。先ほど前野さんの言われた「優しい、いい方たちなんです」ってのはなんかご存じですか。一緒に天国へ行きましょうってことなんです。要するになんでおせっかいするか、これやりましょうよ、礼拝の時間来たらやりましょうよっていうのはなぜかという、一緒に天国へ行くためだよ。だってわれわれ、見ず知らずの人が死んだときに、その人が天国へ行けるようになってお願いするんです。見ず知らずの人にお祈りするんですから、その人、天国へ行けるようにアッラーお願いしますよするんですから、隣にいるこの人が天国、一緒に行こうよっていうの当たり前話でしょう？ ということをお優しい人たちだって言ってるんで、この心をどうやって日本人ムスリムたちが分かるようになるのかなっていう。これから私は努力したいと思いますけども、その辺りが心掛かりですっていうことですね。

岡井 永井さん、ありがとうございます。いろいろ課題が出てきましたけども、周囲への働きかけみたいなものも徐々に進んでいく。その一方で、できたモスクっていうのを昔からの継承の話ってのは出てましたけれども、特に熱意の継承みたいものが今後、問題になっていく。継承の中で第1世代をリスペクトするだとかっていうのも日本人ムスリム、あるいは次世代に分かってもらえるのか、この辺りが問題だということですね。同じ大塚からいらしているアキールさんは他に何か大塚のことありますか。

アキール 今、永井さんが言った心配ですね。今後はどう続けていくかという問題に対して、一つはこれ本当に大きな問題なんですよ。何かいうと、子どもたちの間に話し聞いていると、小さい子どもたちね、聞いていると、あの人はこんな物を食べる、あの人はカーフィルだぞ。それがすごく嫌な気持ちに出て、あの人はカーフィルだから地獄へ行くべきだというような気持ちで言ってるのを聞くとすごく心配になってくる。なぜならば、イスラムは預言者の愛情で始まったわけですよ。だからカーフィルが死んだ、預言者がそこに座っていた。死んだ人の遺体がそこから通ると預言者さまがそこを涙出したんですよ。この人が、私がここいて頑張っているけども地獄行っちゃうんだぞ。私の努力、足りなかったというような感じで。だから今ここにいるムスリムの人たち、子どもたち、大人、みんなやっぱりその気持ち、預言者の気持ち、カーフィルというものはつまりアッラーのことを信じないということがカーフィルっていうんですね。この人は人間だと。アッラーが作ったものだと。

それから日本の普通の人たちのキャラクターを見ると、私は90パーセントはイスラムに

親切持って(?)ると言うんですよ。そういう人たちがなんで地獄に行くんですかと。だからやっぱりその痛み。この人はどうやって助けるかと、さっき言った永井さんの話、どうやって天国へ連れていけるだろうかと。その心で私たちの世代が続けてくれるかどうかと、その心配なんです。だからこれからの学校とか、勉強会とか、レクチャーとか、そういうもの全部含めて、どうやってイスラムじゃない人はアッラーの天国へ連れていけるだろうかと。その痛みで、もし頑張れば、今までやってきたこと、同じようにインシャーアッラー、やっていけるだろうと。ちょっと楽天的になったんですけども、私いつもちょっと軽く見ちゃうんですけど、物事を。それを絶対にアッラーには難しいことはない。大事なことは、私たちは自分の子どもたち、第2世代の人たちにこの気持ちをどうやって伝えるかっていう問題なんですよね。日本人がそれにしてないことは伝えてられないからなんです。だからその仕事は私が、インシャーアッラー、私たちがそういうことをやっていけば社会はもっともっと、日本が住みやすくなる。そしてみんな天国へ行ける、インシャーアッラー。

岡井 アキールさん、ありがとうございます。もう随分、長い間、教育問題に関わってらっしゃって、幼稚園も学校も作られてっていう、いろんな成果を出してこられたアキールさんのお言葉ですけども。この前、モスクでアキールさんにお話し伺ったときもカーフィル問題、いとも簡単に使われてしまう言葉になってしまっている。われわれと、われわれじゃない人っていうのを簡単に分けてしまうっていうことに対して、すごく心配をなさっていたのを思い出しました。子どもの心持ちみたいなものをどう作っていくかっていうのが一つ課題であるっていうことですね。次、別府についてお願いできますか。

ターヒル 私たちは、私も結構前から日本に来ましたので、まずはモスクがなかったのもそれで頑張る。モスクのあとは例えばパキスタンだったら、もう宗教の勉強とかは全然なかったです。それは普通の国で普通の大学に行って、自分の夢のために頑張る、本当は宗教の何とか、勉強とか全然なかったです。それはでもここに来た後は少しして、でも自分の子どもたちは、私たちはパキスタン人なんで、例えば周りからいつもアザーンが聞こえますとか、あと他のそれでも分からないようにいろいろなイスラム教のことが分かりました。でも自分の子どもたちはもう日本に生まれて、それはもし将来とか、例えばそれだけに普通の学校に行けば分からないように思って、家でも頑張るって子どもにいろいろなイスラム教のことを教えたり。でも子どもたちは大きくなって、本当に反抗期とかそれになって、本当に興味が多分ないみたいですよ、と聞いていたんです、私は。でも最近子どもに話して、多分、そのことじゃないです。少し、子どもたちが何とか宗教を守ると思いますが。

今後、私たちの問題は自分の問題が分かった後では、これはイスラム教の他の人の問題かなとそれで分かります。今は例えば子どもたちは大きくなっています。パキスタンとかだ

ったら子どもの結婚とか、そのために普通は親はそれをしていますけど日本のシステムがちよっと違います。自分で探さないといけないとか。でも例えば私たちの子どもたちは日本に生まれて、日本でいろんな(聞き取り不可)でも、今、イスラム教の、それが持っているからそのことは自分で夫婦とかそれ探することができないです、今の場合は。それで私たちはそのために何をするかどうか考えてます。今は例えば、1人の日本人の女の子がイスラム教になって、私には「先生、今、自分の家族がすごくプレッシャーがあるんですよ、私には。もしそのままずっと続けるのは自分ではできません。私を助けてください。」それで探して、他のイスラム教の人にも会って結婚して、今は彼女は子どももイブラヒムともう1人の子どもがいて、そのような今も考えてますよ。私たちはそれを何とかシステムを作らないといけない。

このことはすごくレスポンシビリティがあるんです。そんなの簡単な仕事ではないです。すごくレスポンシビリティがあります。それで前はブラザー・ハールーンとか他のかたがたにも話して、どのようなシステムがそのために私たちはできますかとか。例えばシカゴにある自分のリレティブ、向こうはモスクに行くとボックスみたいな置いてあるんですよ。それで自分は何をしていますか、あとどのようなスターとか、どのようないいですかとか書いて、あとでコミュニティの2人か3人、Very responsible personでチェックして、いろいろな例えば何とかできますかとか。そのようなシステムはどういうふうに作るか、今、考えています。それはセカンドジェネレーションのために多分とても大事だと思います。

ハールーン 結婚の話ですね。

ターヒル そうです。

ハールーン お見合いの話ですね。

ターヒル For matchmaking.

岡井 ターヒル先生、ありがとうございます。結婚の話ですね。今こそ本当に親御さんの気持ちというか、そういったものが強く表われる内容だと思うんですけど、そのシステムができないか、今後それが問題になるんじゃないかって ことですね。今、結婚の話がありましたけど、他に例えば前野さん、次、こちらに回していきましようか。

前野 私が次世代に対してこれまでどんなケアをしてきたかっていう問いに対しては、まず自分の家系では第1世代のムスリムとして、自分の伴侶を日本出身のムスリムから選びました。それはなぜあえてそう言うかというと全て独断と偏見でお話ししますが、自分が

もうさっきの林さんのお話じゃないですけど、文化や習慣の絢交ぜになったイスラムをイスラムとして語られるのにもう飽き飽きして、きちんとイスラムを勉強したい、イスラムを本格的に学びたいという青雲の志を抱いてダマスカスにイスラム学留学を目指して行った当初、最初の年はそれまでずっと抱いていたように自分が結婚したいのはボーンムスリマだと。つまり外国出身のムスリム。願わくはもう外国の、アラブだったりムスリムの国で生涯、骨を埋めるんだという気持ちでいました、最初の年は。

でもその年の間に心変わりをしまして、神様が心を変えてくださいます、ちょっと待てと。自分に対してですけど、おまえがそんなつもりでいたら、ここは自己中なんです、日本にいつまでたってもイスラムなんか根付きっこないんじゃないかと。要は日本人でイスラムに導かれてムスリムになった人間が、自分の幸福や将来、やがて恵まれるであろう家族の子どもたちの信仰を守るために日本の外で暮らすのが一番いいと、安全だと思ってたからそういう希望を抱いてたんですね、最初。でも思い返したわけです。みんながみんなそんなことしてたら、日本でイスラムなんか根付きっこないんじゃないかということで、よりよく日本でイスラムを伝えるために日本に戻って日本で生きていくべきだと。ならばそこではパートナーとしてうまくやっていくためには、日本出身のムスリムがいいに違いないということで今の家内と一緒にになったんですけども。悲しいことに子どものうちの1人は自分がハーフがよかったとか、クォーターがよかったとか言いますけども。ラーハウラワラークツワタイツラビッラー。見てくれじゃないっていうですね。

続いて別の視点からは、第2世代に対して自分なりにしたことというのは、自分が仏教からイスラムに改宗したのが18のうら若き頃でした。自分自身がロールモデルを必要としたわけです。日本出身のムスリムとして。イスラムをきちんと学んで、そしてイスラムを発信している。イスラムという伝教活動、布教活動だったり教育活動をされてる人は誰か。ほとんどみんな大学の先生だったり、自営業されていたり、普通の会社員でそういう人っているのかなど。私には見付からなかったんです。いないなら自分がなればいいでしょうってということで七転び八起きで頑張ってます。

それから当初は自分の子どもたちのためにというつもりで2010年1月から始めている週末学校というものが、現在に至るまで233回を数え、ほそぼそとですが続いています。これは行徳のヒラー・マスジドで行ってるんですけども週に1回、もともと土曜日だったんですが日曜日に移って久しいです。もともと行徳のヒラー・マスジドの活動として、イブニングスクールという形で平日に行われてる別の授業もあるんですけども、そこに来ていた子どもたちを当時の私が見たときに、無理もないですよ。平日の日中、子どもたち、普通の学校に通って、その後で親に連れられて来ているので疲れた顔してるわけですよ。自分自身に危機感を抱いたわけです。これじゃあ、子どもたちはひょっとしたらマスジドを嫌いになってしまいやしないかと。なので、自分の子にはそういう思いはしてもらいたくないということもあって自分で始めたんですけど、だんだんと他の家族たちの協力も得て、もともと自分が始めた一番大きな条件というのが親子学校にしたいと。イブニングス

クールのシステムというのは親御さんたちがマَسジドに連れてくる。それだけの努力でも評価はされるべきなんですけども、でもそこに連れてきたらそれでおしまいなんです。イマームに、クルアーンの先生に子どもたちのイスラムの教育を任せておしまい。自分たちはフリータイムをどうされてるのか知らないですけども、そんな感じで。でも子どものイスラム教育って親、みんなの責任でしょうということで、必ず親御さんの父親か母親、どちらか付き添ってくださいという条件の下に続けています。答えるのは1番だけですか、今は。

店田 いや、もう全部。

前野 もう全部？ 失礼しました。二つ目の心配事というのは求道心です。ムスリムの2世代として道を求める気持ちです。ムスリムの家庭で生まれ育った以上、願わくは最低限の信仰っていうのは三つ子の魂百までであってほしいわけですけども、でもムスリムとして例えばきちんとイスラムを勉強したいとか、もっとムスリムとしての自覚を持って歩みたいという気持ちは、やはり唯一の神様から与えられるものだと、心に投げ込まれるものだと思いますので、こればかりは、それが芽生えたものを育てていくことはできても、私たちが与えられどうこうできるもんじゃないですから、祈り続けるしかないかなと。

その中で控えておきたいのは強制ですね。うちで強制はしてないですよ。ほら、あんな感じでうちの娘。文化差から出るのか、外でちらほら見ると、もう詰まる所はイスラムの問題じゃなくて親子の問題でしょ、という問題に尽きるところが多くなると思うんですけど、イスラムの名を語って強制的にいろいろとさせられてきた子どもたちが不幸で育っているのをちらほら見聞きするにつれ、くわばらくわばらと自戒の意味を込めて自分にはしたくないと思っています。でも、よく日本でありがちな、一般の日本人って宗教は個人の問題と捉えがちですから、当然、その子どもたちは自分でどの宗教も自由に選べるでしょうっていうのには賛成しません。というのはムスリムはムスリムで、イスラムを選ぶっていうのは1足す1は2っていう当たり前のことを当たり前として教えることに等しいと思っていますので、そういった最低限のことは親の務めとして示していきたいと思っています。ありがとうございました。

岡井 前野さん、ありがとうございました。家族のための活動がじわじわと週末の学校につながり、広がりがあったわけですね。親子学校なんですけど、親が連れてきてどういったことをやってるんですか。活動の内容です。

前野 活動内容は簡単にですね。クルアーンの独唱の練習。マーシャーアッラー、大塚マَسジドでやってるようなクルアーンの暗記者をたくさん生み出すのは素晴らしいと思うんですけど、そこまではとても短い時間でしかないんで、できないでして、少なくともクル

アーンを読む練習の時間を持つのと、あとムスリムの歌を歌ったり。これなんかは親の中でも意見が分かれるところでしょうけど、でも欧米やムスリム諸国ではナシードという、ウルドゥー語でナートですか、というイスラムの歌がしっかりあって、それがみんなの情操教育に役立ってるんですよ。放っておいても、たとえ音楽を禁じても、音楽の授業なんか出るとか禁じても、子どもたちは日本で暮らしていたら日本の邦楽だったり洋楽を覚えちゃうんですよね。親しんでしまう。オルタナティブが必要でしょうということで誰もやらないなら自分がやるしかないんじゃないって、またそういうのが出てきまして、ほそぼそとですがやっていますと。あとはアラビア語の初歩的なものだったり、イスラムの基本的な教えを日本語でやるのが大事ですので。あとはイスラムと何か関係性を付けた工作。すごろくだったり、かるた作りだったりカード作り、いろいろとありますけども工作だったり。時には寸劇というのもやってきました。

岡井 どうもありがとうございます。こういったクルアーン、歌、アラビア語、工作といったことをやっているということで、強制はしないぞと。

前野 ラークラーハ・フィッディーン。宗教に強制なしと、コーランにあるとおりです。

岡井 何か失敗とかあったんですか。

前野 失敗？いや、ないですね。

岡井 特にないですか、分かりました。続きまして大塚のほう、お二方にお答えいただいていますけれども、あらためてハールーンさん、今までまだ出てない活動等ありましたら。あとはここに書いてありますような、次世代に引き継ぎたくないこと、みたいなことを含めて実際の活動などをお話しいただければと。

ハールーン アメリカとかヨーロッパに1980年代に行った人たちの子ども、どうなってるかっていう、振り返ってみると、大体、第2世代の人たちがイスラムからかなりもう離れてるんですね。同じ心配、日本でも1980年代か1990年代に来た人たちの子どもについて、私は同じ心配をしています。私の経験で申しますと9割の子どもたち、特に20歳過ぎた子どもたちは信仰を持ってるかどうか分かりませんが、聞くと「お父さんがムスリム、お母さんがムスリム」という答えが多いようです。その原因としては、当時、マスジドが少なかったこともありますし、ご両親も非常に仕事で忙しい。だからとても希望はありますけど、自分の子どもにはそこまで教育しなかったせいだと思うんですけど、多くの第2世代、特に20歳過ぎた子どもたちは心配ですね。

大塚マスジドでは、うちもクルアーンは毎日、日曜日以外はやってるんですけど、その

他にタルビヤ教育のために土曜日の子どもの勉強会、お母さんたちの勉強会などなどやっています。正直、そういう勉強会に来て子どもは非常に少ないんですね。大塚には割と30人ぐらいは来てるけど、でも全体トータルのこと考えると非常に何パーセントしかないんですよね。特にそういう活動やってる所はマーシャアッラー、行徳のモスクとかいくつかのモスクではやってるんですけど少ないんですね。多くの子どもたちに「 Masjid行こう」ってお父さんが言ってもなかなか来ないんですよ。それが現状です。

このままでは子どもたちどうなるのかと心配があって、大塚Masjid以外の外の活動も考えてみました。例えばサッカーのチームを作りました。大塚のサッカーチームを作って、それほど定期的にはやってないんですけど、でも非常に効果がよかったですね。今までMasjidに来てない子どもが外で1回、2回遊んで、3回目は一緒にMasjidに行って礼拝しようという非常に熱心になってる子どもたちもいます。

それから私がイスラムのことを理解してるのは、ただお祈りして自分の信仰を持って、それでおしまいではないんですよ。イスラムの歴史を勉強すると、イスラムが社会のために非常に役に立つというか、社会にいろんなことを与えたのはイスラムですね、昔から。でも残念ながら今の時代だと、そこはわれわれが足りないんですね。私の希望、夢ですね。イスラムに対してのイメージは、日本の社会のために役に立つことをやりたいんですね。

例えば今、考えてるのは大塚で初めてボーイスカウトを作ろうとしてるんですね。ボーイスカウト連盟とちゃんと連絡取って、今、登録の段階です。どうも見ると全国、日本のボーイスカウトはかなり減ってるんですね。そこでムスリムのボーイスカウトの団を作りたいっていう話をしたときに非常に日本連盟は喜んで、子どもが減ってる所、ムスリムのもし団ができたなら非常にいいことだってことでサポートもらってるんですが、社会のために役に立つもの、それからMasjidに来ないムスリムですね。外の活動だと多分、気楽に活動できるかと思うんですね。こういった活動ですね。

あとはホームレスの支援とかやってるんですけど、そういうところもこれから力入れて、Masjidに来てない子どもたち、そういうところを参加してもらって活動に関わってほしいんですね。心配事は多くの子どもが、繰り返しになりますけどMasjidに来てないんですね。その子どもたちはこのままどうなるのかという非常に大きな心配です。最近、SkypeでいろんなMasjidからコーランの勉強とか、そういった制度できたんですけど、コーランだけじゃなくて日本語のレクチャーとか教育とか、それは相当、頑張らないといけないかと思います。以上です。

岡井 ハールーンさん、ありがとうございます。社会貢献みたいなことをやっていこうということ、あと全体的な若者のモスク離れみたいなことに対してどうアプローチしていくかっていうことが大切だということなんですが、3番目のどういったことを控えていこうとか、そういった問題意識はないですか。今までやってきた活動の中でこういうのは失敗だったとか、こういうのはやめておこうとか、そういったことってというのはあり

ませんか。

ハールーン そういふのはないんですけど、努力は非常に足りなかつたという後悔はして
る、正直なところですよ。もっともっとみんなの力を合わせて頑張らないといけないと思
いますね。

岡井 ありがとうございます。そしたら古城さん。

古城 福岡 Masjid のアクティビティーというより、私が現場でよく聞く話をお話しさせ
てもらいます。浜中さんとか永井さんとか、アキールさん、ハールーンさん、前野さん
のお話を踏まえての話とか共通する話もあるんですけど。第2世代といつてももう30を
超えてお子さんもいらっしゃるような世代の方なんですけど、お父さんが日本に来て、日本
で生まれたムスリムとお話をするところがあるんですけど。彼らからよく聞くのが、私のよ
うに、改宗という言い方を私はしないんですけど、チェンジではなくてチョイスという言
い方をするんですけど、私のようにイスラムをチョイスした人がとてもうらやましいとい
うお話を第2世代の方がしてて。彼らは第2世代といつてもボーンムスリムなんですけど。
もう生まれたときからご両親からイスラムで、場合によってはイスラム以外のものをシャ
ットアウトされるような状況で生活をしていて、イスラムがいいのは分かるけど、どうい
いのかは分からないということをよく聞くんですね。30歳ぐらいの日本で生まれたボーン
ムスリムの方たちからは。なるほどねと思つて、そう考えたら私たちはすごく自分でイス
ラムという道を選んで、自分で一生懸命勉強して、イスラムってことを自分ではどうなの
か分からないんですけど、一生懸命いいムスリムになろうというのはチャレンジをしてるの
で。なので何が言いたいかというと、まず浜中さんのさっきのご長男のお話もそうなん
ですけど、前野さんのプレッシャーをあんまり掛けないということにも共通するんです
けど、インシャーアッラー、そのすごく強いプレッシャーだとかシャットアウトをしな
くても、アッラーが多分、道を見つけてくれるんじゃないかなというふうには思つます。それ
が一つですね。

それと次ですけど永井さんのお話で、いろいろ学校への説得等々という話、なるほどと
思つて、福岡も中村さんなんか結構、小学校なんか高校を相手取つてハラル教育だ
とかイスラムの在り方なんかをレクチャーされてて、東区のエリアの学校は何校か、もう
かなりイスラムのことをよくご存じで、場合によっては金曜日の午後はもう来なくていい
よつて学校、たくさんあるんですよ。

そんなような状況にもうなつてるので、他にムスリムのコミュニティの中で完結するん
じゃなくて、私としてはムスリムたちをフォローする環境を整えることも重要なこと
というふうにも思つてます。先ほど中村さんとターヒル・バイとお話をしてたんです
けど、北九州の国際交流協会という所のミーティングがあつて、そこでムスリムとい
う立場ではなく

て、私が今、福岡県行政書士会の国際渉外部長という立場なので、その立場でミーティングに参加して。行った瞬間にまず保健師さんが私の所に来て「大変なことになってるので相談があるんです」って話になって。「何ですか」って聞くと、インドネシアの留学生の奥さんが日本で出産されて、生後2カ月の子が、母乳があんまり出ないらしくてミルクを飲ませてたけど、ミルクにウシのタウリンが入ってたからってことで飲ませなくなった。2カ月だからどんどん体重が増えるはずなのに全然増えないっていうのを、ただ、お母さんはそんなに心配はしてなかったけど保健師さんがそれを見付けて、どうしたらいいですかということに私の所に相談に来て「それは大変ですね」っていうことで、福岡のインドネシアのシスターのリーダーの方に電話をして、直接やりとりをしてもらって解決したんですけど。

そういうふうに国際交流協会は誰に聞いたらいいかわからない。 Masjidがあることぐらいは知ってるかもしれないけどコネクションがない。ムスリム・ムスリマの独特の問題が起こったときに、どこにどうすればいいかっていうのをわからない。それがムスリムコミュニティの中で起こったことであればムスリムコミュニティの中で解決はできると思うんですけど、そうじゃなくてムスリムコミュニティじゃない方に発見された問題っていうのをどういうふうに解決するかというと、結局、外側とのコネクション、とても重要だと思うんですよ。インターナショナルセクションのようなことか。そういう外側とのコネクションをもっとMasjidがたくさん持つと、いろんな所がMasjidのフォローも当然してくれるようになると思うし、ムスリム・ムスリマのフォローもどんどんできる体制が作れるんじゃないかなと思う。それは教育に関してもそうです。さっきの金曜休んでいいよって話もしていけると思うし、教育の話も学校の話もどんどんもつとしやすくなると思うんですね。だからコミュニティの中で頑張るのは当たり前として、外側とのコネクションをもっと一生懸命頑張るといいんじゃないかなというのは現場にいて思います。

岡井 古城さん、ありがとうございます。ハールーンさんの所の例えば被災支援ですとか、ホームレス支援もそうですけど、外とつながるって社会連携をすることで、より住みやすい社会になっていくのではないかっていうアプローチの活動が大切だっていうことですね。分かりました。中村さん、何か福岡関係で補足されることありますか。

中村 福岡関係ではないんですけども、少し次世代に対する提言みたいのはあります。

岡井 ぜひ。

中村 次世代に願うのはたった一つなんです。イスラムの変容、日本のための変容に努力してくださいということなんです。1400年ぐらいイスラムの歴史あります。世界中いろんな所へ行ってます。何百年かかかってイスラムのコアの上にそれぞれの地域の文化が付

いて、それぞれの表現方法ができてますので、日本は今、それがない。そのために苦勞してるのが次世代の人たちなんです。だから次世代の人たちはこれから自分らの体に合ったイスラム、コアは変わらないけども体に合ったものを作っていただきたいと思う。そのために私たちが何をしなければいけないかというと、まず一つは自分の経験を私たち、押し付けないということです。自分の歴史とか経験を。彼らは時期を経てそういうの分かってきます。今はあえて押し付けないという。それとイスラムが楽しいってことを私たちの背中で見せるということ。

実際、私はムスリムになろうと思ったのは、ボーンムスリムの人たちと一緒にいると楽しそうだった。ちょっと生活で苦しいとか、いろんなことがあったとき苦しかった。でも彼らと一緒にいるとこれは楽しそうだと、一緒に生きていけそうだと、そういうふうなとき。だから苦しむために入ったわけではないということがある。残念なことにさっき古城さん言ったように、ボーンムスリムの子どもたちはチョイスができないっていう。生まれながらにですね。実は留学生といっぱい会ってます。彼らは先ほどターヒルさんが言ったように生まれながらのムスリムですから、あえてイスラムを意識してなかったんですね。ところが日本に来て、あらためて自分はイスラムだということを意識して、あらためて勉強し直すという。だから今、生まれながらの第2世代は、ある時期が来ると多分、はっと自分がムスリムだということに気付く時期があると思う。そのときからスタートすればいいと思うことですね。ですから今、あえて無理に押し付けたりとか、自分の経験とかいうことをしないでいいと思っています。

あと心配事は何かということ、実は親としての子どもの心配は当然あります。できれば安全に生活もできて暮らしていただければと思っていますけど、それは普通の親と同じ。イスラムに関してはさほど心配はしてないです。親がしっかり生きてれば不思議と子どもは見てますので、少しづれても多分また戻ってきてくれるんじゃないかなろうかっていうような、能天気かもしれないけどもそういうふうな意味合いで信頼してます、子どもたち。うち、2人おります。

これから行っていかないといけないことは何か、逆にどんなことを控えていかないといけないかということなんですけども、一番最初に言ってましたように、日本におけるイスラムの変容が必要だと私は切に思ってます。そのために何が必要かということ、日本の社会のことを勉強してもらいたい。日本の文化のことを勉強してもらおう。日本の人間関係のことを勉強してもらおう。これがとても必要だと思います。私は子どもに特にしつけたのは何かということ、あいさつの仕方と食事の仕方なんです。もし私がこのとき亡くなったら、早死にするつもりだったんですね、実は。もう60過ぎてしまって、本当は30代ぐらいで死ぬつもりだったんですけども倍を重ねてしまって。死んだとき、子どもはどうしたらいいかって思ったとき、あいさつの仕方と食事の仕方さえ知ってれば何とか暮らしていけるだろうと。安直な考えでした。それは二つともどちらかというと日本の文化につながるんですよ。日本の文化を知ってるってことは、生活様式以外に思考方法もすごく影響されると

いうことです。その元で、はたと自分がムスリムだと気付いた第2世代が、新たにどうやって日本で表現していくか、イスラムを。方法論として日本の文化とか知っているとすごく強いと思うんです。そういうふうなことをやっていっていただきたいということと。

次は逆にどんなことを控えるかという、これはもう林さんもおっしゃってたんですけど、文化とイスラムを混同している大人が教えるな、指導するなということなんですね。どうしたらいいかという、私、いくつか仕事持ってますけども、お茶の先生やってるんですね。家元制度ってのあるんです。これは日本のヤクザと同じ制度なんです。強い力でもって下を締め付けていって、下からお金を吸い上げるというやり方です。その場合、上が必ず指導をする。そのときに家元は言うんです。先生を教育しろ。先生を教育する、末端を教育するんじゃないんです。先生を教育すれば下が従う。だから各組の組長さんもしっかり上がコントロールしてやれば、それに従ってきけると。

さっき自分の経験を押し付けるとか強制するなどと言ってましたが、もし、はたと自分がイスラムのことを勉強したいと思ったときに、そばに文化とイスラムを混濁して、それを強制するような人は排除してきちんとそういうふうな。イスラムってのは独立性が強いので、強い組織的な統一者、正直言って難しいと思いますけども、信頼できる組織があれば、そこが実は、仏教とかでいうと布教師っていうような言葉がありますね。専門に布教する方を育てる。それからイスラムの例えば日本ムスリム協会とかが教え方、指導の仕方のために各マスジドから教育部門の人を呼んできて、こういうふうな教え方がいいよ、こういうふうなやり方がいいよみたいなレクチャーをして、その人を専門に窓口的に。そしてさっきターヒルさんとか古城さん言ったけど、そういう組織があるということをしめないと親は分かんないから、自分の経験とか、あるいは自分の仲間だけでやって無理な洋服を着せたようなムスリムになってしまう恐れがある。ですからそういうふうなことをやらないようにしたらどうかなって。

でも全般的に悲観はしてないです。見てください。浜中さんにしろ、前野さんにしろ、古城さんにしろ、第1世代、立派な方が多いじゃないですか。小さい頃からやってるわけじゃないんですけど。僕は尊敬してます、皆さん。こういう素晴らしい方たちの背中を見て第2世代は多分、間違いなくいい人間として日本人の社会に貢献できると思ってます。以上です。

岡井 ありがとうございます。きょうのテーマも次世代継承みたいな話なので、継承っていつてみたら、なじんでいく過程みたいなもので、イスラムとかムスリムっていうものが日本になじんでいくためにどうすればいいのかみたいなアイデア、ヤクザ制度を採用しようという。そういったアイデアもあるんだということでお話し伺ったんですけども。

前野 家元制度でいいかな。

岡井 家元制度にしましょうか。最後、シャヘレヤールさん、次世代ではありますが境町の代表として来ていただいていますので、境町の第1世代の人たちがどういったことを考えて、どういったことをやっているのかみたいな観点でお話いただけますか。

シャヘレヤール 境町はものすごいムスリムの方が多くて、ムスリムの中の雰囲気もたくさんあるんですけど。オリーブ学院という幼稚園を経営していたり、先生がすごい考えてくれてる先生だなんて。ジャービル先生なんですけど。自分で日本語勉強して、どうやって子どもたちに日本語で教えていくかということにすごいこだわってるんです。日本語で教えるってことを。今、自分で幼稚園も協力してマーシャーアッラー、建てて、その後に運営の仕方、今度、幼稚園でどうやって子どもたちに教育していかなくちゃいけないのかという、日本で売ってる書籍を買って勉強してるんです。日本の子どもに対してどうやって接するのか、どうやって触れ合っていくのかっていうようなことをちゃんと勉強しながら、イスラムと併せて勉強していてすごいマーシャーアッラー、頑張ってます。

あと例えばこないだ防災訓練とかもあったりして、ちゃんと子どもたちに日本の中でのしつけとか、そういうのもちゃんとやっている。あとは学校に通ってる子どもたちに対して、こういう配ったのなんですけど、大体ほとんどの日本のモスクなんかで、学校に通ってる子どもたちにはクルアーンしか教えてないんですね。イスラムはクルアーンだけじゃなくて人との付き合いもあるし、自分の性格もあるし、商売のこととかたくさんあるものなんですけど、そういったことも子どもたちに教えていかなくちゃいけない。実際、私たちの子どものことを考えてるんですけど、子どもをどういうふうにしたいのか。クルアーンだけ読めるようにしたいのか、少なくとも自分の信仰を持てるようなレベルにしたいのか、それとも一人前のムスリムとして育てていくのか。その中にクルアーン読むだけじゃ足りなくて、そういうことも教えていかなくちゃいけない。そういうのも群馬で日本語訳の、それもジャービル先生が訳してやってるんですけど。

あとどうしても、自分も今そこいるんですけど、教材がまだ足りないんですね、イスラム教材が。そういうことも力、どんどん加えていく必要があります。それはマーシャーアッラー、前野先生とかはナシードとかで頑張ってるんですけど、そういうのもすごい必要なんです。例えば自分とかもそうなんですけど、昔、テレビとか見てたときにどうしても聴いてた曲をつい口ずさんじゃうって、口でなんかやってるときあって。もしその代わりにナシードとかだったりしたら、別に何も問題ないというの。そういうのをマーシャーアッラー、日本語でやってくれててすごいうれしいなという、預言者物語とかそういうのもIslamHouse.comで訳されてて、それをマーシャーアッラー、すごい物語として子どもたちも聞きやすいとか、そういうのも分かっていく必要があつて。あとマドラサもあるんですけど、週6ぐらいで朝から晩まで子どもたちがそこでもう学校通わずにアーリムとして、学者を目指してそこで頑張ってる、そういう子どもたちもいるんですね。こういう日本でまだまだ教材とかも足りないし、情報発信のそういう、頑張ってる所もあるんですけ

ど、まだまだ足りない部分があって。これは境町で努力してる部分です、子どもたちに対して。

あと今、離れていった人たちに対してどうすればいいかっていうのを皆さんに考えてもらいたいんですけど。もちろんアッラーがヒダヤー、導きを示したら彼は戻ってくるんですけど、彼が自分が変わりたいっていう気持ちもなければアッラーは与えないんです。自分が何かきっかけで何かに直面したときに、自分は駄目だな、自分は無力だなんていうの思って、初めて何かを求めるようになるんです。なので僕とかは積極的にそういう人たちに会いに行って、もう一回、イスラムの話とか、仲良くなってからなんですけど、いきなりシャリアとかたたき込まないで、仲良くなってすごい美しさとかそういう話しして、いろんな所へ行ったりして。すごい向こうも自分と同じ若い人たちが真面目にやってるんだとか、そういうのすごいと思ってくれて、そういう、今、チームみたいなのもあって、自分たち若い世代、20代前半とかの友達とかと一緒に会ったりして。彼らも驚くんです。日本にいながらこの人たちは頑張ってるんだなって。俺らと同じ境遇というか、ハーフなのに頑張ってるね、みたいな感じですごい親しくなって、それからだんだんとよくよく教えていく形になって、個人的にはそういう感じでいろんな。

実際に午前中来てた人の中で1人はそういうクラブとか行ってた人なんです。何もイスラムのことは分かんなかったけど、今はマーシャーアッラー、すごい頑張るようになった。つながりが大事ですね。どんなにお酒飲んでても何やっても、彼は信仰心持ってるってことで、私たち尊敬しなくちゃいけないんですね。彼がもしかしたら死ぬときには、自分が全然イスラムから離れてる場合もあるかもしれないし、彼がすごいイスラムで真面目にやり始めて、イスラムの地位高くなる可能性も十分あり得るんですね。だから誰かを見下すとかそういうのは全然考えてはいけないし、彼らを尊敬持って、自分のきょうだいだと思って、さっきも話したように一緒に天国行こうっていうようなね。ここに繋がっていくんじゃないかなと思っております。

岡井 シャヘレヤールさん、ありがとうございました。ジャービル先生、境町で私もお話を伺いますけれども、ハード面のこととソフト面、両方やっていこうというようなアプローチでやってますよね。シャヘレヤールさん自身の活動というか、つながりから育てていこうというような。

シャヘレヤール そうですね。

岡井 分かりました。ここまでモスクの代表、マシドの代表の方の活動を伺ってきました。きょう、次世代の継承ということで第2世代の方にもたくさんお越しいただいてます。第2世代の方にお話をしたいんですけど。今、第1世代の人がいろいろやってることっていうのは分かりましたよね。問題・課題はあるにせよ、これまで第1世代の人がいろんなこ

とを考えながら、実は頑張ってたんだっていうのが少し伝わったのかなと思います。今までの見方っていうのは第1世代の人から見たムスリムコミュニティの今後っていうお話だったんですけども、ここから、それに第2世代のリアリティーを加えてみると、さらにムスリムコミュニティの将来というのが見えてくるんじゃないかと思うんですね。ここからは第2世代の人にも議論に加わってもらいたいと思ってます。それに口火を切っていただきたいと思っているのが林さんなんですけれども、午前中の話も含めてコメントがありましたら。

林 すいません。私が第2世代って呼ばれていいのかどうか微妙なんですけど。午前中の話は日本で生まれ育った、今、20代、30代の子たちがメインでどういう思いをしてきたかっていうのを大体、話には聞いてきたんですけど。ざっくりまとめると、みんな親からルールとか、これしちや駄目、あれしちや駄目っていうのばかり聞いてきて、それを強制されてすごくつらかったと、嫌だったと。それでみんな自分はムスリムだっていうこと、特にハーフの子とかは多かったので、ミックスですね。他の日本人のクラスメートとかとは違うっていうところと、見た目も違うし文化も違うし、それに加えてムスリムであることも違うので、違うっていうこと自体が、もうコンプレックスになってしまっていたっていうところをすごく皆さん言っていて。特に思春期の頃とかって友達から認めてもらいたいとか、みんなと一緒にやりたいみたいな気持ちって誰でもあると思うんですけど、多分、そういうところすごくつらかったのかなと思っています。

特に重要だなと思ったんですけど、子どもたちが言っていたのが、親世代、第1世代はみんなムスリムマジョリティーの国からきて、ムスリムマジョリティーの環境が当たり前だと思ってる。だけど今、自分たちは現実にいるのはムスリムマイノリティーの世界なんですよね。それを親は、ムスリムマイノリティーの世界でムスリムでいるっていうことがどういうことなのかを分かってない、っていうことをすごく感じてたと。自分には味方がいないっていうふうに言っていた子たちもいて、親に言ってももちろん分からないし、友達はムスリムが少ないっていうので味方がいない。すごく孤立してしまった。そういうのを自分がムスリムだとか、自分がミックスだっていうことで既に外との関係では孤立しているのに、それに加えて親がイスラムだからこれしろとか、これするとか言ってくるから、すごい親とかイスラムとかまとめて嫌になっちゃうっていう構図だったんですよね。それを親世代が理解するのってものすごい大事なのかなと私は思いました。

先ほども言った話とつながるんですけど、イスラムと文化とごっちゃになってこうしろこうしろっていうふうに言うからいけないのかなと思って。イスラムでのルールとかやるべきこととかいうのはあって、それを教えるのは大事だと思うんですよ。そこに強制があったらもちろん駄目だとは思いますが、そこを教えるのと。自分の国のお父さん、お母さん出身国の文化とかを教えて伝えていくっていうのも、それはそれで大事なことで、子どもにとってはアイデンティティーを育む上ですごく重要なことだと思うんですけど。

それを分けて教える必要があるんじゃないのかなと思っています。子どもたちはそういう家庭に育ちながらも日本にいますので、日本の文化に触れて日本の中で育っていくわけですから、自分の生活の中でどこまでを自分でやらなきゃいけないのかっていうのを、いつか自分で見極めなきゃいけないわけじゃないですか。そのときに、ここまではイスラムだっというのが分かってるのと分かってないのと全然違うと思うんですね。なのでそこは重要かなと思います。

それから第2世代に限らずなんですけど、改宗ムスリムとかとも時々する話なんですけど、自然体じゃないんですよ、みんな。ムスリムと接するとき。私ももうそれこそ17年、18年ムスリムなので長いですし、前野さんとか皆さん、もうナチュラルなんだと思うんですけど。新しいムスリムとか、新しくちゃんとムスリムとしてやろうと思ったばかりの第2世代とかは、そこをすごく、僕のムスリム顔、本当は自然体こっちみたいな、やっぱりあるんだと思うんですね。そういう使い分けっていうか本来あるべきじゃないし、あるとつらいし、みんな自然体でいられるようにするには、どうすればいいのかっていうところを考えていかなきゃいけないのかなと思っています。

一例なんですけど私、夫がアメリカ人で、それこそ普段、自分としては普通に生活してるつもりで。あるとき、夫のアメリカ人ムスリムの友達と一緒に、私の日本人ムスリムの割と改宗したばかりの子と4人で買い物に行ったわけですよ。そしたらその子は、別に何にもしてないです。買い物行っただけなんです、本当に。コストコに行ったんですけど。それだけ帰ってから「もうすごい気持ちよかった。すごく自分がこんな自然体でいいんだっていう。ムスリムと一緒にいるのに、こんなに楽な気持ちでいいんだって初めて思った」って言っていて。そういうのってあるんじゃないかなと思うんですよ。みんな、それぞれの国の文化をある意味、押し付けられてるって言ったらあれですけど、押し付けられてるので、日本の文化を捨ててこういうふうにならなければいけないみたいなことをいっぱい言われていて、それを期待されてると思うから、新しい改宗ムスリムの人をそれを頑張ってしまうみたいなのがあるところがあって、それがつらくなって離れてしまうとかいうのもあると思うので、そこも要素かなと思います。

それから、ごめんなさい、長くなって。さっき言った子ども世代のマイノリティ感に通じるところなんですけど。私たちムスリムは日本におけるマイノリティの1グループだっという自覚をもうちょっと持ったほうがいいかなと思います。それはムスリムだから特別だっという、もちろんムスリム独特の問題とかもいっぱいありますしあれですけど、ムスリムだから他の人には理解されないとかじゃないんだと思うんですよ。外国人だったり、今ちょっと思い付かないですけど、いろんなマイノリティがいて、でもそういうマイノリティをサポートする人たちもいっぱいいて、支援団体とかもいっぱいあって、みんな、それは何をやりたいかというマイノリティの人も生きやすい社会をつくらうよっていう、ざっくり言ったらそういう思いがあって支援団体とかやってる人はやってるわけじゃないですか。ムスリムはそこに乗っかっていくべきっていうか、そこに入っていきべきだと私

は思うんですね。入っていくっていうのは、私たちはマイノリティの1グループですと。私たちが含めたマイノリティみんなが生きやすい社会に日本、していきませんかという動きをしていくべきだと思うんです。

だから例えばですけど LGBT とか同性婚とか、今、はやりじゃないですか。イスラムでももちろん同性婚が許されていないのとかは当然ですし、それは私たちのあれではないんですけども。でも個人的な意見ですけど、同性婚に私が個人的に賛成することと、思いとしてですね。同性婚が認められるような多様性が受け入れられる社会にすることと、ちょっと次元が違うんだと思うんですよ。ムスリムは多様性が認められる社会をつくっていく方向に努力していかなければ、今後、日本の中で生きやすくないと思うんですね。ごちゃごちゃしてますかね。別に皆さんに同性婚に賛成してほしいとかちっとも思ってないんですよ、私も。私も個人的な信仰っていう意味ではもちろん賛成じゃないですし。でも日本の社会でノンムスリムの人同性婚できるようになるかどうかっていうのは、またちょっと次元が違うんですよ。っていう意味で、マイノリティ同士の、なんで私が同性婚の話をしてるかっていうと、LGBT とかすごい毛嫌いしてるムスリムの人、多くなっていう印象を受けていて。みんなすごいたたき合うわけじゃないですか、マイノリティ同士が。マイノリティ同士がたたき合ってもいいことは全く生まれないので、もうマイノリティがいてもいいんだよっていう社会をつくるように手を組まないと駄目だと思うっていうことです。すいません、長くなって。

あと最後に1個だけ、今の話と変わるんですけど、日本の中でノンムスリムが圧倒的 majority で、確か0.001パーセント以下なんですよ。日本の中でムスリムの人口的にいうと。そんなに私たちマイノリティなのに、なぜかマジョリティーのノンムスリムをすごく見下してる態度の人って多いと思うんですよ、ムスリムの中で。自分たちは分かっている、自分たちはイスラム信じてて特別なんだみたいな態度。そういう態度でいって、それはみんなに仲良くしてもらえないでしょうっていう感じを受けるわけですよ。そもそもイスラム的に私はその見方は間違えてると思うし、私たちが別に偉くてムスリムとして今いるわけじゃなくて、アッラーのヒダヤーがたまたま与えてもらったからムスリムとしているわけで、そこに上下関係とか全然ないはずなのに、なんで見下すのかっていうところ。あとは自分たちはマイノリティなんだから、自分たちのほうが弱い立場なんだっていうのを、ある意味、もうちょっと理解して、そこの自覚にのっとってやったらいいかなと思います。ごめんなさい、長くなりました。

岡井 林さん、ありがとうございました。

林 すいません。

岡井 午前中の内容を踏まえた上で提言までしてくださってありがとうございます。マイ

ノリティという言葉が出ましたけれども、マイノリティであっても社会の課題に対して、ただマイノリティー一つのグループがそれに取り組むというよりは、他と手をつないで連携することでより大きな課題にも取り組むことができる、公益性を高めることができるっていうこと。あとは見下しているっていう話がありましたけれども、これは次世代の問題で、アキールさんが先ほどおっしゃってくださったようなものにもつながるのかなと思います。

お話を伺っていて、先ほど午前中の話でジャッジしないって言葉がすごくよく出てきたんですね。あとは待ってみる。この二つの言葉が次世代のディスカッションではよく出てきたんです。もう次世代の人って多様性の中で生きているんだと思うんですね。だからこそ自分と違う、あるいは自分と違うことをやっている仲間、あるいは外側の人に対して価値判断を取りあえずやめてみる、置いてみるっていうことが、次世代の中では当たり前になっているのかなというような気がしました。先ほど私、マイク持ったときに第1世代の頑張りとかこれまでの見方に、次世代のリアリティを加えていきましょうという話をしました。ここからは時間も押してきましたけれどもフロアの、特に第2世代の方を中心に第1世代の方に聞きたいこと、あるいは伝えたいことがありましたら、いい機会ですのでセッションをしたいと思います。それではフロアにオープンにしますので何か意見、質問等ある方、挙手をお願いいたします。

クレシ すいません。きょう、お手伝いさせていただいておりました早稲田大学人間科学研究科のクレシ愛民と申しますが、いち第2世代ムスリムとして意見させていただきます。まず午前中では司会として参加させていただいてたんですけども、今、林さんがおっしゃっていただいた内容に加えて、第2世代のかたがたが思っていること、親世代に期待していること、あるいは中にはもう既に第3世代のお子さんがいらっしゃるかたがたもいらっしゃいましたので、彼ら、彼女らが思っていたようなこととかを踏まえて、皆さまの、マシド代表者のかたがたのお話を聞いていたんですが。率直な印象として第2世代の意見、思っていることと、親世代が思っているところがマッチしているところもあれば、かなりずれているところもあるなというふうに思います。

今、もちろん3時間ほどの会議だったんで、ここで全て申し上げることは不可能ですが、あえて強調をしておきたいのが彼ら、彼女らがイスラムを重荷と捉えているっていうことをあらためて認識していただきたいなというふうに生意気ながら思います。その理由としてはいくつか挙げられていたんですが、さっきジャッジって言葉も一つのキーワードでしたけれども、形式的なっていう言葉も非常に何度も皆さんが言っていた言葉でした。例えばそれはクルアーンの読み方だったりとか礼拝の作法だったりとか、そういった形式的なところばかりを知っていても、たとえばいくらハーフィズになって、いくら礼拝の仕方を知っていたとしても、イスラムが大嫌いで、20何歳になってノンムスリムとして生きるのであれば、それは全く意味がないので、そういった形式的な側面ではなく、人によって言い方は違いましたが、本質的なところっていう言葉を使う方もいらっしゃいましたし、

僕はイスラムの美しさっていうことで同じようなところを表しますし、中にはイスラムの
かっこよさっていう言葉を使う第2世代もいましたし、いろんな言葉で皆さんが使いま
すが。要するに何が言いたいかっていうと、与えられるイスラムっていうのが非常に魅力的
なものではないっていうのと、あともう一つ、納得できているものではない。何か質問・
疑問を抱いたとしても、それを親世代にぶつけても全く答えが得られない。「それが当たり
前だから」、アッラーってどういう存在なのって、マイノリティとして育つ第2世代たちが
抱く疑問に十分に答えられる環境、答えを持ち合わせていない。持ち合わせていたとし
てもそれが届いていないっていうのが一つの大きな問題かなというふうに思いました。

また、すいません、どなたかちょっとあれですが、イスラムが楽しさだったりとかハッ
ピーとか愛情とかっていう言葉も、午前中の部で出てたんですけども、そういったのと
全然つながってこない。ノンムスリムのライフスタイルにむしろ憧れている子たちが多い
っていうのも、非常に問題なのかなというふうに思います。繰り返す言うようになります
が、形式的な側面だったりとか押し付けだったりとか、本質的なところを全く伝えないこ
とによって彼ら、彼女らがイスラムを重荷に感じている、納得できないものだと捉えて
いる。だからこそ徐々に離れていくんだというところですね。

あと話している最中に1人、親世代についてだいたい話していたんですけども、途中で
「ここちょっとすいません。言わせてください」っていうことであえて強調された方がい
たので、それを申し上げますと、親世代にこういうことがあった、こういうことをされて
きた、だからこういう思いがあるっていう話はもちろん伝えるんですが、だからといって
親世代を悪者扱いしようとしているわけではないっていうことも認識していただきたいな
というふうに思います。もちろん親世代が愛情、子どもに一番いいものを与えたい、イス
ラムがいいものであるからそれを与えたいって思うのは当たり前であって、彼らが悪者だ
ったっていうふうには思っていないっていうことですね。ただ、限界があったと。ニーヤ
はよかった、動機って言えばいいんですかね。インテンション、動機ですかね、はよかつ
た。だけどそれが残念ながら届いていない。親世代が示すイスラムっていうのと、子ども、
こういう第2世代、次世代が求めるイスラムっていうところに大きなギャップがあつた
っていうところですね。それはさっき出てた文化っていうのも入ってきますし、あるいは知
識がなかったりだったりとか、あるいはマイノリティでムスリムとして暮らすっていうこ
とにどういう苦勞が付いてくるのかっていうところへの理解のなさ。

あとはイスラムの変容について、皆さんなりに、特に午前中に集まってくれたかたがた
はそれなりの活動だったりとか、熱い思いを持っているかたがたではあつたんですけど
も、一つここで他の第2世代のかたがたもいらっしゃいますが、僕たちの言う意見って
いうのが非常に偏った意見であることっていうのもひとつ理解していただきたいです。そ
もこここの会に、ムスリムの前に座れるような第2世代っていうのも、ある程度、偏つ
ているっていうこともひとつ理解していただきたいですね。もちろんどっちに何パーセント
っていうのも言えないですけど、モスクにどれくらいの若者が来てるかっていうことを考

えるだけでも、いかに多くの第2世代がそもそもこんな会議に、ムスリムの前に座りたくない、ムスリムを毛嫌いしている人たちがいかに多いかっていうのもひとつ理解していただきたいです。

ていうのも、現状の否定をする親世代が多いなっていうふうに正直思ってしまうんですね。何かネガティブって言うよりか、次世代が今まで経験してきたこと、親世代にこうしてほしかったっていう話をすると、もう親世代からのバッシング、要するにイスラムのネガティブなイメージが広がってしまうから、その話はやめろみたいな。そんな事実は存在しないんだというふうに隠してしまおうと自分の中で抑える。もしくはそれをSNSだったりとかそういったところで抑えてしまうっていう話がありました。実際あの中で。情報の偏りっていうのがあるっていうのと、あとは問題を解決するには、まずは問題があるということを確認することが大前提なので、現状の否定をせず第2世代の声をいかにくみ取っていかなくてはいけないのかなっていうふうに、午前中の話を聞いてて思いました。親がどう思っているのか、どうしたいのかってのももちろん大事ですが、それを受けて次世代が何を思っているかっていう意見も十分に参照していただきたいなっていうふうに感じます。すいません、生意気な感じですが午前中の話を聞いていて、かつ自分の経験を踏まえて、あるいは他のヤングムスリムたちと話した上での意見です。

岡井 愛民君、ありがとうございます。こんな会議ですけども第1世代と第2世代のつながり、パイプができること、第1世代から第2世代、第2世代から第1世代に水が流れるような場になればいいなとは思いますが、これに対して多分、アンサーがあるかもしれないですけども、もうちょっと第2世代の方のお話し聞いてみたいと思います。他にご意見だったり、こういったことを伝えたい、そういったことがあればぜひお願いしたいんですがいかがですか。

イワタ 僕はイワタリュウイチっていうんですけど、今は高校2年生で、僕は12歳の頃にムスリムになったんですけど、その話は置いて。僕は第2世代として一つ言いたいことが、あくまで僕の個人的な意見なんですけども、第1世代のかたがたが、頑張って第2世代のためにいろいろ尽くしてくれているのはとてもありがたいんですけど、例えばモスクとかでいろいろレッスンとか毎週授業とか行われているんですけども、正直、そういうレッスンはちょっとつまらないです。僕は高校生なんですけども、小学生とかもっと年齢が小さい子を見てると、彼らは本当にもうほとんど真面目に授業を聞いてないんですね。だからやっぱりつまらないと思うんで。

しかも彼ら、小さい子どもたちは自分がマイノリティであることを、自分がムスリムっていうことにあまり誇りを持っていないんだと思います。例えば学校とかである程度、差別じゃないんですけど、違うからよく聞かれるじゃないですか、クラスメートとかに。「なんで普通のお肉食べられないの？」みたいな質問とか。そういった質問に対して子どもが

答えられない場合は、孤立されたみたいになっちゃうじゃないですか。だからちゃんとそういう、ごめんなさい、あんまり話がまとまってないんですけども、今のモスクとかで行われている授業ってクルアーンの中に書かれているのが何かとか、預言者さんの教えが何かっていうか、教育が硬いと思うんですね。もうちょっと生活とか、もっと子どもがムスリムとして日本という社会にどのように溶け込めるかっていう教育が、僕は多分、必要だと思います。

岡井 ありがとうございます。こういったご意見もあるということなんですけれども、他にありますか。

アンマール アッサラーム・アライクム。パキスタン出身で千葉県で育ったアンマールと申します。よろしくお願ひします。僕はずっと行徳に住んでて両親ともパキスタン人なので、最初はよくウルドゥー語のプログラムに連れていかれてたんですけど、年々、僕のウルドゥー語の能力が下がってきて日本語が勝ってきたんで、付いていけなくなったんですね、プログラムの。そこで現れたのがシェイク・アハマド前野で。いろいろプログラムを作ってくれて、そこで日本語のカリキュラムだとかを作っていて、そういうのが今、多分、行徳にはあるんですけど他の場所に行くにあんまり見掛けないなと思うんですね。だから日本の文化を知ってて、日本語を母国語とする教師が今、結構、必要なのかなと第2世代で思っています。

岡井 ありがとうございます。まだご意見ある方いらっしゃいますか。アリアンさんとかいかがですか。

樋口 ちょっと質問、第1世代、第2世代って散々やったけど、どういう分け方なんですか。前からそういう分け方があって、突然のあれで恐縮なんですけども。第1世代、第2世代って言われてますけど、大体どういう時代で分けていらっしゃるのと思って。

前野 自分、血筋的にですね。

岡井 私がお答えして。

樋口 ていうのは例えばわれわれ日本ムスリム協会の場合は戦時中から戦後、1960年代ぐらいまで1970年代ぐらいまで第1世代。その次は今度、第2世代だとわれわれになると思うんですけど、一応、海外留学して帰ってきた人が2代、それからの人が3代、前野さん辺り4代世代ぐらいかな、そういうふうに大体、見当付けてるんで。そうすると今の皆さんの第2世代っていうのはそれよりもっと下になるわけですね。

岡井 そういうことでございます。

樋口 そうですね。分かりました。

岡井 今回・・・。

樋口 私、55年の経験なんですけど、皆さんの話聞いてて、結局、われわれがずっと考えてきて悩んできて、ぶつかってきた問題ってところが同じように、環境が変わってます。早稲田大学でまさかイスラムの話がこんなに大きくされると、われわれが入信した頃は想像も付きませんでしたけどね。ですから環境が変わってきてますけども、非ムスリム国におけるマイノリティの悩みってのは、案外、共通性が多いなという感じで参考になってます。ありがとうございます。

岡井 樋口先生、ありがとうございます。今回の世代の分け方についてなんですけれども、かっちりした縛りっていうのは特にはないんです。ただ、モスクができ始めてから生まれた子ども、そこを基準にその上と下で分けています。

永井 生まれたっていうのはボーンムスリムっていう意味？

岡井 いや、誰でも結構です。

アキール イスラムに入ったっていうことで。

永井 誰でも。

岡井 入ってもいいですし。ただ、活躍されてる時間が違う。前野さんは、「私はヤングだ」っておっしゃるかもしれないですけども、今回は第1世代に入って。

前野 おじさんです。

樋口 70年代が第1世代になるんですか。モスクができ始めたっていうのは。

岡井 大体1990年代ぐらいからを考えています。

樋口 1970年ということは20年。

岡井 歴史でもちろんその・・・。

前野 血筋でもちろん日本での暮らし的にヤングってことです、違いとして。

樋口 なるほどね、分かりました。

岡井 はい、今回はそういう縛りになっています。ターヒル先生はご用事があるので、この後、大分に戻られるということで。それを踏まえまして、第2世代のアリアン君。

アフメド アッサラームアライクム、こんにちは。僕は葛藤も、ちょっと知らない方のほうが多いと思うのでちゃちゃっと説明いたしますと、僕は両親がパキスタンで、育ちはずっとほぼ日本なんですけど、その中で先ほども話にもありました大塚のほうでクルアーンを全部暗記して、一応もう今、ハーフィズなんですけど。僕自身はすごく環境に恵まれて、今もこうやってこんな会議に参加できて第2世代のほうなんですけど。僕も今までいろんな葛藤とかがあって、あと周りの友達の話とか、そういう人たちの話、悩みとかを聞くと、それを代弁っていうことしかできないんですけど。

まずいくつか挙げると、ほぼ愛民さんに全部取られちゃったような気もするんですけど。親世代はいろんな方法で私たちにに対して知識を入れるために、いろんな会をやったり勉強会をやったりとかしてると思うんですけど、そこでどうしてもルール押し付けになってしまっている。単純にもう結論から言うとルール押し付けになっていて、よく使うんですけどこの例えは、パキスタンとかそういうマジョリティー側のムスリムの国にいると歌駄目、アルコール駄目って言われても別に周りが飲んでない、食べてない、やってないから自分もそこまで違和感に思わないんですよ。でもマジョリティーが、ここでいうと周りがアルコール、普通にブタ食べるっていうときに自分がやってないことに、親にはやっちゃ駄目みたいなこと言われてて、そのとき、普通に普通の人なら、なんでっていう質問が自然に湧いてくるんですよ。そのときに親世代に質問すると、親はこれが駄目って普通に言うんですよ。そこで怒った言い方する人もいれば、いろんな言い方するんですけど。僕は生まれたときからウルドゥー語のほうも親世代が普通に話すような言語も話して、日本語も今、話してるとおりなんですけど。

見てて思ったのが、親世代もその答えをちゃんと持ってないっていう。侮辱してるわけではないんですけど、子どもにちゃんと伝えられるようまず日本語力、子ども世代は日本で生きてきて、僕もあるんですけど、日本人として日本語のほうをネイティブとしてるので、親から伝えられていない。伝える内容もちゃんとした根拠に頼ってなってるかどうかっていうところもあって、そういうことでただルール押し付けるじゃなくて、そのルールを守ることによって何がいいことがあるのか、そういうところまで教えられてない

ような現状があるんですね。それは周りの悩みを聞かされる友達の親とかだったり、そこから辺の環境が僕は恵まれましたけど、そういう環境が整ってなかったですよみたいな話です。

あともう一つ、先ほども話が上がりました文化、変容ということで使いましたが、僕はイスラムと日本の文化の変容というか、融合っていうふうに言ってるんですけど。親世代はそれぞれの国の文化をすごく大事にして、僕は先ほど言ったとおりパキスタン出身なんですけどほぼ育ちは日本で、これからも日本で活動して、日本人で日本にこれから生きていく人たちに対して活動していきたいんですね。そうするとき一時期あったんですけど、自分はパキスタン人だって言い張ってたときがあったんですけど、今はパキスタン系日本人でいいじゃんみたいな。もうそっちのほうが、日本人として認められたいっていう自分の他のアイデンティティを捨ててるわけではなく、日本に生きていくならばもうちょっと日本を優先させたいっていう気持ちも、多分、私以外にもいろんな第2世代はそういう気持ちを持ってるんですね。僕、個人的な話もそうなんですけど、親世代に対してぶつけてしまうと、これは日本人じゃなくて海外から来た親世代に対してなんですけど、そこで自分の文化を大切にしろっていうふうになるんですね。そこでこれがすぐ解決されるわけではないと思うんですけど、こういう問題も一つありますよということで、僕としては日本に住みたいのであれば、もう何々系日本人っていう感じでいいと思いますっていう僕なりの意見です。

あと最終的には、今、見てるとおり、いろんな第2世代がここに今、集まって、やる気がある第2世代として多分見てると分かると思うんですけど、そういう第2世代に対して日本のことも分かってイスラム的な面でもちゃんとやる気のある人たちに対して、もうそろそろ頼ってほしいっていうか、サポートですね。いろんな面でもイスラム的な悩みでもそうですし、経済的な面でもそうですし、そういった悩みとかを聞いてあげて、これから現状が変わるっていうのを親世代に覚悟をしてほしいということです。自分たちのやりたいようには、もしかしたらならないのかもしれないですけど、それは日本にとってはそれが重要なだっていうことを。これからも本当にアッラーが導くことなので何とも言えないんですけど、僕がジャッジすることではないんですけど、そういう現状に対して柔軟に対応してほしいという。

古城 厳しいですね。

アメフト 最後に順番入れ違っちゃってあれですけど、親は強要はしちや駄目なんですけど、教養を身に付けさせるっていうことはすごく大事で、そういうのを大事にして強要は駄目ですけどいろんなことを教えて、先ほど言ったとおり、なんでそんなことをやるのか、なんでこういうルールを守んなきゃいけないのかっていう美しさの面も教えて、道がそれたときにそこでほったらかしにする親も中にはいるなというふうには伺って。ここにいる親

は多分、心配をしてそういうことをしない親だと思うんですけど、そこはほったらかしにするんじゃないくて、ある程度、厳しくもしてほしいっていうのもあるんですけど、そこをどういうふうにバランスよく厳しくしていくのかっていうのは、本当に難しいことなんだというのは分かるんですけど、そういうところも子どもたちだけに、自分が先生になって子どもたちを生徒だと思って押し付けるじゃなくて、親世代の自分も生徒だと思って一緒に追求していくような姿勢で取り掛かってほしいっていうふうに思っています。すみません、僕もさらに生意気だったんですけど、ありがとうございます。

岡井 刺激的なご意見をありがとうございました。ここでお知らせなんですけど、もう既にプログラム上は実は会議の時間、終わっているんです。ただ、私たちの意向としてはもう少しだけこの話、続けたいなというふうに思っています。もしお認めいただけるようでしたら、もう少しばかりお付き合いください。よろしくお願いします。今のお話だと本当にもう変わっていくことっていうもの、第1世代もそうですけど第2世代も変わっていかないといけない。その上でコミュニティも変容していくのかなということを感じました。まだヤングの方いらっしゃるんですけど、例えばシャハラさんとか、角岡さんとか、もし何かおっしゃりたいことがありましたらどうでしょう。あるいはマティンさん、いかがですか。お名前を。

マティン バングラデシュ出身のマティン・ジュバエルです。僕も第1世代、第2世代の定義、ここでの。僕の認識としては、第1世代は海外で生まれてイスラム教の家庭で育て、こっちに移住してきた世代を第1世代っていうふうに言って、ここでマイノリティとして生まれ育った人たちを第2世代って言っているっていう認識だったんですけど、そういう定義で話させていただきますね。

僕の場合、多分ここにたくさん第2世代の人たちいるんですけど、僕はこういった会議に参加したのはこれが初めてで、友達で紹介で、きょう、ここに参加させていただいたんですが。ここの大学の学生でもあって、せっかくここでこういう会議があるっていうことで参加したんですが。

他の方とだいぶ自分の立場が違うのは、他の人たちの話を聞いてると、皆さんすごい敬虔なイスラム教の信者で、親が積極的にイスラムを教えて、それに向き合ってきたことでいろんな葛藤だったり、いろんな経験があつてつらい思いもあったけど、今こうして自分たちもイスラムの道を選んで進んでるっていう人が多分、多いと思うんですね。僕の場合は両親、イスラム教徒ではあつて信仰心はもちろんあるんですけど、お母さんは大体のこと、イスラムの基本的なことはやっていて、一方でお父さんはあまりやらないっていうタイプの方で。もちろん信仰心はあつてラマダンとか断食はする、イードのときはモスクに行くっていうことはするんですけど、普段のお祈りもあんまりしないっていう感じだったんですね。最近になってちょっと変わってきたかなっていう傾向は僕としては感じてて、

お父さんもちょっとずつお祈りも習慣的にしてきてるのかなっていうふうもあるんですけど。

そういった中で僕は先ほどのお話の中でもあったんですけど、お父さんは忙しくて、ものすごい仕事人間でもあったのであまり家になくて、いろいろ教わったのはお母さん、子どもが一番影響を受けるのはお母さんで。なので、お母さんはどちらかっていうと信仰心も比べると強かったのが、基本的なことは教わりました。ただ、バングラデシュのムスリムコミュニティを見ると、今はいろんな人が来て日本にいるバングラデシュ人人口も多いですけど、僕が育ってきた中ではバングラデシュの集まりに行くと大体、僕が2世としては一番年上か、そんなことが多かったんですね。そこで見てると僕より年下の子たちと比べても、まず宗教以前にバングラデシュにもそこまで関心がない子たちが多かったり、バングラデシュの集まりなのにベンガル語でしゃべらない、みんな日本語で話したいっていう子たちが多くて、その後でお祈りとかもあんまりやってない。僕は小学校の頃からはだんだんお祈りも5回するし、コーランの読み方も習ったり、そういう基本的な部分はやっていたので、どちらかという信仰心が強いのかなっていう安心感っていうか、優位に思っていた部分があるというか、そういうのがあって。ただ、ここに来てみると同じ世代なのにもっともっと勉強して、もっとよく知ってる人がいて、全然知らないことだらけになっていうふうに思っ。特に最近、大学生になってからうすうすそれを感じてきてて、勉強しないとイケないっていう思いは強く感じています。

ただ、僕と似たような立場にいる子たちの多くは、多分、厳格で宗教に積極的な家庭に育ってきた子たちにとっては、宗教への参加は簡単なものなんだと思うですよ。簡単って言ったならあれですけど。それに比べると、あんまりそういう家庭じゃない第2世代の子たちもたくさんいて、そういう子たちにとってはイスラムに興味はあるけど、モスクでいろんな活動されてることも実際知ってるけど、なかなか外から見るとそういうコミュニティに入っていくのって難しいのがあって。まだウエルカムな感じが正直しないというか、自分の勉強不足かもしれないですけど、もうちょっと自分で調べてみる必要があるかもしれないですけど、勉強したいって思う中で今までの自分の生活……。

岡井 すみません、ちょっと時間が。

マティン すいません。

岡井 まとめていただけると。

マティン まとめると、今、大学生になって勉強も忙しくなりますし、宗教に完全に入って、それに時間を全部費やすっていうのは自分にとっては正直難しいです。なので、ちょっとずつだんだん勉強していける、かみ砕いて、だんだんと理解を深めていけるような環

境づくりをやっていたら、こちらとしてはありがたいです。

岡井 ありがとうございます。先ほどのアリアン君の話が親に向けてというような感じでしたけど、今回、 Masjid に向けて第1世代にやってほしいことというアプローチでした。他に第2世代の方、もうあとおひとかたぐらいが限界だと思うんですが、もしどうしてもこれだけはお話しておきたいということがありましたら、おひとかたぐらいですかね。どうですか。いかがですか。大丈夫ですか。よろしいですか。じゃあ、角岡さんどうぞ。

角岡 初めまして。私は角岡姫奈と申します。父がパキスタン人で母が日本人のハーフで、主人が日本人で今、隣にいますけど、あと息子がすいません、きょう、ちょっと騒いじゃって、2歳の息子がいます。私の子育てをしていく上で、今、あらためて感じていることというのをお伝えしておきたい。先ほどから意見が出ているように親の動機は正しいけどそれが届いていないとか、モスクで行われている活動が子どもたちの心に届いていない、魅力的に見えていない。その理由を大人の方たちにはもうちょっとしっかり考えてほしいなというのはあって。

というのも自分の経験を踏まえてお話しすると、自分が思春期、日本で生活していく上で、どうしても頑張れなかったんですね。親から強制されても、それが正しいって分かっていても、自分の自我と戦うエネルギーがどうしてもなかった。集団の中で自分のイスラムのアイデンティティーを守りながらやるべきことを実践していくっていう、どうしてもそのエネルギーがなかった。足りなかった原動力って何だったのかなっていうのを今、考えてみると、何事も頑張るためには頑張る動機が必要で、頑張る理由が必要で。それがイスラムにとってはアッラーへの愛情だったりとか、アッラーを愛する気持ち、自分の宗教を愛する気持ち、預言者さまサッラッラーアライヒワサラムを愛して、彼のやり方をまねしたいっていう気持ちが大きく原動力になっていくんだと思うんですけど、それがすごく大きく自分には欠けていたっていうのがあって。

アッラーを愛するとか宗教を愛するっていうのは、その前に愛するってどういうことなのかっていうのを教えられているかどうかっていうのもすごく大事だと思うんですね。幼少期っていうのは、すごくそれを親とか周囲の大人との関わりを通して学ぶ時期だと思うんですよ。なのでイスラム社会全体で子どもを育てるっていう習慣をまず作ってほしい。愛情を与えて、そして愛情をもらうっていう風習を作ってほしいっていうことと、そういう基本的な子どもの欲求が満たされて初めて、宗教的な知識を受け入れる準備が子どもにはできていくと思うんですすよね。なので基本的な欲求っていうのはまず愛情を満たしてあげるっていうことと、さっきも意見が出たように、もう少し自分たちを信頼してほしい、自分たちに託してほしいって言ってたとおりに、適切な権利を与えてあげることとか、適切な立場とか役割を与えてあげること。そうやって子どもに対してのレスペクトを持って接してあげることで、子どものいろんな欲求が満たされて、初めて宗教的な知識

をどんどん受け入れていく準備ができていって、その先にマイノリティとして、でもどんな状況に置かれても突進していく、頑張っていける力が備わっていくものだと思うので、今、お話ししてるんですけど、簡単に言うとそういうことを私は皆さんにも伝えておきたいなと思いました。以上です。

岡井 角岡さん、ありがとうございます。大変、示唆に富んでいる話でしたね。共に創るということは共創ってという言葉がありますが、その言葉をこの時間ちょっと感じました。信仰心もそうですけどコミュニティも1人では、あるいは一つの世代ではつくっていけないです。他のマイノリティとつながるのも多分、新しい何かをつくっていくときに共創っていうものがあるんだろうと思います。ここまで第2世代の方のお話し伺ってきましたが、最後にアンサーの時間を本当は設けたかったんですけども、かなり時間が押しています。最後、どなたかに代表してアンサーをしていただければと思ったんですが、アキールさん、ごく手短に今までのお話について何かアンサーがありましたら。

アキール ビスマッラーヒッラフマーニッラヒーム。これは返事になるかどうか分からないけれども、私、感じたのは結局、皆さんが探してるものがあるんですよ。それは何かということね。一つは第1世代っていわれる今の親たちの世代だと、結局、宗教は完全に理解していると思っている。だからそれを子どもに伝えたいと、それで幸せになってほしいと、成功してほしいという気持ちになるわけですよ。ところが何が忘れてるかという、イスラムは少なくとも23年かかって預言者の所に届かれたわけですよ、少しずつね。それが今の1400年後になって親が、それから先生が、きょう、イスラムになったらもうすぐに子どもに教えてあげたいんですよ。それは難しいんですよ。だからこれが時間はかかる。それから第2世代の人今はまだ理解をする途中なんですよ。いろいろ研究してるから、それからいろんな思想もくる。その思想はどういう気持ちで伝えなきゃいけないかということは、私たちが習う必要があるわけ。ですから学校とかモスクとか家庭とか、そこで計画的に教え方、どういう先生がどういうものを説くか、いろいろな勉強もコースやって、何時間のコースとか何週間のコースとかいろいろありますけれども、そういうちゃんとプランニングして、例えば5年とか10年とか20年とかいうような区切って、私たちがもう少し勉強して教える必要があると思いました。

岡井 ありがとうございます。まだお話を伺いたいところではあるんですけども、もうかなり時間も押しております。この後も時間はありますので個別にお話をいただければと思います。この会をもう閉めなくてはいけないので、ここからは閉会のあいさつといたしましてまずは小島先生からお話をいいですか。

小島 そっちへ行ったほうがいいのか？ 一応、この会の共催をしております、といっても

あんまり何にもしてないんですけど、お金は出すだけかもしれませんけど。アジア・ムスリム研究所の小島と申します。私は人口研究者なので将来っていわれると、これから移民政策次第じゃないかっていう、ムスリム移民の方が政策によっては大量に入ってくる可能性があるわけで。そうするとおっしゃってるような、今いらっしゃる1世と2世はそのままずっと年を取ってくってということじゃなくて、だんだん新たに来るかたがたと入れ替わる可能性があるということなんで、その辺はどうなるか分かりませんが。例えばインドネシアからこれから大量に介護関係で来られる方がいるかもしれないし、留学生という名目で介護学校へ通う方もいるかもしれないし。最近、ベトナムとネパールの方、急増してますけど、それは留学生という名目で実際は同じ経営の介護施設で働いてるっていう方も結構いるわけですね。それから留学政策だっってどうなるか分かりませんし、難民も今ロヒンギヤの方が、少なくとも60万人ぐらい外へバングラデシュを中心にいられてるので、そのかたがたが2年以内に帰るっていう、一応、協定はできたんですけど実際に帰るかどうかっていうのは分からないので、そうすると日本が引き受けるって可能性もあるわけで、その辺のところによっても日本におけるムスリムの人口の構成はかなり変わる可能性があるってところなので、直接、きょうの話とは関係ないですけど、将来っていうとそういうことも考えていかなきゃいけないかなと思っています。

あとは私どもの研究の宣伝で、出入り口の所にもありますけれど2月26日にハラルに関するワークショップをやります。きょうも食べることは大事だっって話がいろんな先生がたから出ましたけど、これはたくさん出入り口の所にあると思うし、こちらにもあります。それからあとこれは留学生の調査、英語で書いてるんですけど、ご興味があればありますってということで、九州大学の方と愛媛大学の方が割と答えてくださったんで、きょう来られてる先生がたはやっぱりそういう所から来られてるので。そうかという感じで、それぐらいで終わります。どうも本当にきょうはわざわざお越しいただきいただきまして、ありがとうございました。

岡井 小島先生、ありがとうございました。続きましてイスラーム地域研究機構の桜井啓子先生からごあいさついただきたいと思います。

桜井 皆さま、長時間ありがとうございました。イスラーム地域研究機構の桜井でございます。きょうは皆さまがたの白熱した議論から大変に多くを学ばさせていただきました。私は強く、きょうの皆さまの議論で印象に残った点を申し上げますと、第1世代のかたがたと第2世代のかたがたがそれぞれ抱えていらっしゃる課題は、かなり違うということではないかなというふうに思います。第1世代のかたがたが短期間の間に90、100近いマシジドを作られたっということからも分かりますように、第1世代のかたがたが日本でサバイブするための課題、それはもちろん宗教的なものもありますけれども、マシジドを作ることが一つの大きな解決の道筋だったんだらうと思います。ですからマシジドで集まって

お互いを励まし合って、もちろん宗教もそうですけれどもムスリムとして、あるいは情報交換をし、そして日本語を習得し、この中で家族形成をするということで Masjid 中心のイスラムの生活というのが皆さまがたの支えになってきたのではないかと強く感じました。

一方、日本で生まれて、今、2世のかたがた、みんな日本語が母語でらっしゃいます。そういうかたがたは親世代とは全く違う環境で大きくなられていて、もちろんご両親の祖国に帰ったことがある方もいらっしゃいますけれども、中にはほとんど子どものときに3回帰っただけで郷里の親戚を知らない、日本で育ったって方も結構いらっしゃると思います。この中にどれだけいらっしゃるかわからないですけれども、私は国際教養学部にいますので、きょう、こういう場に来ないけれどもミックスのムスリムの学生、でもほとんど表面的にムスリムってわからないような学生、たくさんおります。

皆さん新しい課題で、2世の方の抱えてる課題というのは、非常に複合的なアイデンティティの選択って、別にどんな環境にしようと、若者にとって自己形成する過程ですごく重要なものなわけですけど、選択肢が多いわけですよ、ご両親の時代よりも。そしてマイノリティであり選択肢が多い。非常にムスリム側に行く、あるいはそのことをなるべく忘れようっていう選択肢すらあるという。パキスタンやあるいはムスリムマジョリティの国で暮らしていたらならないような選択肢もある中で、選択肢があるということはすごく豊かであると同時に、ものすごく苦しいことですよ。選択しなければいけないという。それからそういう課題に直面していて、マイノリティであるという環境の中で、Masjid 中心のイスラムが彼らにとっての支えになるかっていうと、もしかすると違うんじゃないかな。

全国津々浦々にみんな散っているわけですし、若い世代はバーチャルにネットだとかそういうような所でむしろつながるほうが、つながりやすいっていうことももしかするとあるかもしれない。そういうことで異なる課題に直面している。そしてその問題を解決できるのは、私はやはり第1世代ではなく第2世代自身だと思うんですね。もちろん第1世代はサポートする必要があるかもしれないけれども、第1世代が第1世代の問題を自分たちで解決してきたように、第2世代は第2世代自身の問題を自分たちでどういうふうに解決するか、その道筋を探していく以外に解はないんじゃないかなと、私はここで聞いてるだけですので、皆さんもっと悩まれてると思いますけど、そういう印象を受けました。

そして最後に林さんがおっしゃったこと、ものすごく示唆に富んでいて、日本のマジョリティの側としては多様な文化的な背景を持っている人、別にムスリムに限らず、これからもっと増えるはずなんです。そういう人たちが多様な文化的背景を持っていることがマイナスではなくて、それが豊かでアドバンテージになると感じられるような社会を私たちがつくっていくべきで。ですから見て私はかわいそうで、日本人は日本語しかしゃべれなくて文化も一つしかないけど、私たちはこんなにポケットを持っていて、グローバル化の時代に生きるにはむしろそれがアドバンテージなんだよと。私たちが彼らをうらやましく思う、実際、私は結構うらやましく思ってるんですけども、より多くの方がうらや

ましく思えるような環境を日本自身がつくらなくちゃいけない。それは日本人自身がどうやってつくるかっていうと共同してつくらなければいけない。マイノリティの人たちは、自分たちはこういう問題抱えてるんだっていうことに私たちは気付くべきだし、気付いて、どうしたらいいんだって一緒に考える中で私たちも変わる。

ですから私たちにとってマイノリティのかたがたはアセットなんですね。ものすごく私たちが将来変わってイけるための契機、そのヒントをたくさん持っている。ですからそういう意味で複合的な文化を山ほど抱えてる2世こそ、私たちにとっては宝ではないかなって思っています。だから宝の人たちが苦しいと思うような環境をつくらないようにすること。それはきょうお話を伺っていて肝に銘じたいなというふうに思いました。本当にきょうはヒートアップしたディスカッション、すごく皆さん心の底からお話をしてくださったと思います。ありがたいと思います。これを私たちは糧にして、より良い社会のために進まなければいけないと強く思いました。きょうは本当にありがとうございました。

岡井 桜井先生、ありがとうございました。それでは最後に店田先生から。

店田 すいません、3人もあいさつで時間いただいちゃって。今、桜井先生からもあったように日本の側はムスリムとどう対応するかっていうことも非常に大切なことで、最近、モスクが所在している地方自治体の調査っていうのを私のほうでやったんですけども、モスクがあることを知ってる自治体は結構たくさんあるんですね。もちろん全く知らないという自治体もありましたけど。でも知っている自治体でもモスクと交流する意思があるのかっていうの聞くと、7割近くは交流の予定はないっていうことで、日本の側もなかなかいろいろ問題を抱えてるっていうのがそういうところから見えてきました。これは今後の課題ということで。

今回のこういう会議も、取りあえず全国のマスジドに手紙で送りました。いくつか、例えば新潟とか島根とか、もう一つがきょういらっしゃってくれた御徒町とかレスポンスがあった所もあったんですけど、ほとんどのマスジドからレスポンスがなくて。あと郵送物自体が戻ってくると。多分、住所は合ってると思うんですけども、マスジドに日本語の看板が掲げられてないのではないかというのが私の臆測なんですけども。日本で活動されている、あるいはそういう連絡というのを考えると、日本語でぜひマスジド関係者の方にはもしそういうの見掛けたら「日本語の看板出してよ」って言ってください。そうすればちゃんと連絡は届くと思います。というふうないろんなお話の最後にして。来年11回目になります。来年度、私はまだ大学に勤めているので多分やると思いますので、またよろしくお願ひしたいと思います。

きょうは本当に長時間にわたりありがとうございました。またどうぞよろしくお願ひします。ありがとうございました。この後、写真を撮りますのでメインの参加者、その他、写真に入りたいという方は前方のほうにお願いいたします。 (了)